

～ 松蔭 GP2010 採択 ～

神戸松蔭平和プロジェクト報告書

目 次

巻頭言: 宗教主事 勝村弘也…………… p.2

活動点描…………… p.7

折紙裏面に記載した祈り…………… p.8

参加学生レポート…………… p.10,

参考資料: 旅のスナップ…………… p.22

松蔭 GP 申請書…………… p.26

チャペル通信(長崎平和の旅 募集案内)…………… p.27

広島平和の旅 募集案内…………… p.29

チャペル通信(平和月間案内)…………… p.30

長崎聖三一教会での礼拝式文…………… p.31

長崎聖三一教会での被爆体験談原稿(宮本家原爆受難記)…………… p.37

旅の終わりに: チャプレン 藤井尚人…………… p.42

* 以下の文章は、チャペル・ニュースに掲載した報告文に加筆して拡大したものです。

1. 第二次世界大戦の終結が、広島と長崎に投下された原子爆弾と深く関連することは、よく知っておられると思います。毎年、8月になりますと、新聞もテレビも被爆者の体験や被爆地に暮らす人々の「核兵器廃絶」の願いを大々的に報じます。特に昨年は、アメリカのオバマ大統領の核兵器廃絶への取り組みに関する発言を受けて、原爆を投下した側のアメリカが、広島と長崎の記念式典に国家としてどのような態度を示すかが特に注目されました。アメリカは、大使館関係者などが広島に参列しただけでしたが、国連の事務総長の潘基文氏は、広島と長崎の両都市を訪問されました。このことは核兵器廃絶を願う世界中の人々に大きな勇気を与える出来事でした。

本学の宗教センターは、これまでも学生代表が広島に平和公園に千羽鶴を奉納するなど、この時期に開催される広島での行事に係わってきましたが、2010年度はこれまでの平和学習をより前進させるために、大学から「神戸松蔭GP」として予算をいただき「長崎平和旅行」を目玉とする特別な企画を実施することになりました。

2. まず、5月末から長崎旅行の説明会などで学生への広報を開始しました。6月13日には、チャペル奉仕学生がそろって神戸聖ミカエル教会の聖日礼拝に参加し、午後には中村豊主教から短い時間でしたが長崎の歴史についてお話をいただきました。7月5日からは「平和週間」を設定して、ヌーン・サービス(昼休みの礼拝)で平和への祈りを捧げましたが、7月8日には、少女時代に広島で被爆された岡邊(おかべ)好子さん(宝塚被爆者の会・会長)をチャペルにお招きして、生々しい体験談を伺いました。ご家族のことや岡邊さんご自身が生涯を独身で通されることになった事情などを聞くことによって、原爆投下が単なる昔の歴史的出来事ではないことを、参加者は強く感じたことと思います。長崎出身の学生は以下のような感想を書いています。

「今まで、長崎の原爆のことについては少し知識があった。しかし、広島に原爆被害については、同じ被爆地であるがあまり知らなかった。広島に被爆者の体験を生で聞くことができ、視野を広げることができた。」

この後は前期の試験期間に入ったわけですが、学生・教職員の多くの方々が平和公園に奉納する折鶴のために宗教センターを訪れてくださいました。おかげで今年は広島と長崎の両都市の平和公園に折鶴を奉納することができました。なお、この折鶴の用紙には、「聖フランチェスコの平和の祈り」を印刷しました。この祈りのことばを、今回の平和学習の中でもっとも印象に残ったことのひとつにしている旅行参加者もいました。以下に聖フランチェスコの平和の祈りを記しておきます。

「主よ、わたしを平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに、愛を、 争いのあるところに、許しを、
分裂のあるところに、一致を、 疑いのあるところに、信仰を、
誤りのあるところに、真理を、 絶望のあるところに、希望を、
悲しみのあるところに、喜びを、 闇のあるところに、光を、
もたらすことができますように。」

3. 長崎旅行は、8月8日から10日まで2泊3日で行われました。「広島でなくて、なぜ長崎？」と思われる方も多いでしょう。長崎になった理由の一つは、8月6日の広島原爆の日に広島に行くのが授業スケジュールから見て難しいと判断したことです。長崎の原爆記念日の9日ならば、より

多くの学生の参加が見込めると考えました。もっと積極的な理由としては、長崎が日本のキリスト教の歴史や近代化の歴史にとって特別な場所でもあるからです。以下の文章は、参加者を募集した時のものです。坂本竜馬のことは書かれていませんが、それは読者のみなさんに補っていただき、「なぜ長崎？」の答えを読み取ってください。

「歌劇『蝶々夫人』の舞台ともなった美しい港町、長崎はザビエルの訪れた昔から、常に世界へと開かれた日本の窓でした。スペイン、ポルトガル、オランダ、中国から商人がやってきました。鎖国の終わった幕末にはイギリス、フランス、アメリカからも商人や宣教師がこの地を訪れ、日本の変革を目指す若き志士たちに文明の息吹を吹き込みました。しかしまた、長崎は信仰の道を通こうとしたキリシタンたちの殉教の地でもあります。そして1945年8月9日にはこの町の上空でアメリカ軍の投下した原子爆弾が炸裂し、数万の人々が一瞬にして殺害されました。被爆は単なる過去の出来事ではありません。現在50万人とも言われる広島と長崎のいわゆる『被爆二世』は今なお放射線の後遺症に苦しんでいます。被爆した浦上天主堂のマリア像は、戦争のもたらす悲惨さの『証人』として、失った2つの目で私たちに世界平和の実現を訴えています。8月9日という記念の日に、〈平和への祈り〉を携えて、あなたも長崎を訪れませんか。このような案内文に答えて19名の学生(中国からの留学生2名を含む)が参加することになり、藤井チャプレン、宗教センター職員の緋田さんと山科さん、教務課職員の野田さん、それから私の5名が引率者として被爆地長崎を訪問しました。以下に、訪問場所のことなどを書いてみます。これに、帰ってから参加者に書いてもらった報告文からの引用を加えます(なお、旅行参加学生には、事前学習を含めて最も印象に残ったこと3つを書いてもらいました)。

4. 8月8日午後、式典の準備に忙しい平和公園に到着して記念撮影、原爆資料館を見学、爆心地の被爆した「地層」を見る。そこから少し歩いて、自ら被災しながら救援活動に当たった医師の永井隆博士が住んでいた如己堂(によこどう)を見学。たいていの学生は、平和公園の巨大な「像」よりも、茶室程度の広さしかない小さな如己堂に感銘を受けた様子であった。ここでは永井博士に関連するVTRが上映されていたのだが、何人かはそこに釘付けになっていた。(なお、「長崎の鐘」「ロザリオの鎖」など永井博士の著作は、アルバ文庫で今でも読めます。)そこからさらに歩いて、浦上天主堂を訪問。被爆マリア像が国連に登場して、世界的にも有名になったあの場所である。聖堂に入ると、丁度、夕方の記念コンサートが始まるころであった。案内の女性が、私たちが聖堂の前の席の方へと勧めてくださったが、われわれの事情を説明して、後ろの方でコンサートの最初の方だけを聞かせていただくことになった。Dona nobis pacem(主よ、我らに平和を)と歌う心に沁みとおる声に後ろ髪を引かれながら、宿に向かう。宿泊先のホテル清風は、市街地と反対側の港を見下ろす山の中腹にある。すばらしい眺望である。予想していたよりも立派な夕食に全員感激したようであった。

なお、この日は炎天下をかなりの時間、歩いて回るようになっていたので、学生がブーブー文句を言いたさないかと、付添の職員は心配していたのだが、まったくその気配はなかった。「さすが、チャペルに来る学生は違う！」と宗教主事として悦に入ることになった。

この日の出来事について、学生の感想文の中から私の目にとまったものを以下に少し書き出しておきます。なお、引用に際しては、文意を損なわないように配慮しながら、少し文を修正した箇所があります。

「原爆資料館では投下直後の長崎の街の惨状が再現されたコーナーが最も印象的でした。薄暗く、所々で火災が起こっているような光景は廃墟そのもので、阪神・淡路大震災を経験している私にとって、原爆の被害はそれをはるかに上回る非常に恐ろしいものだと思います。また、溶けてくっ

ついたガラス瓶や小銭は原爆が太陽と同じ温度であったためだと知ったとき、非常に驚いてしまいました。」

「(原爆資料館の) 展示物の中で印象に残っているものはいろいろあるが、その中でも原爆の実物大模型が特に印象的だった。あんなに大きいものが空から落ちてきたのかと思うと驚いたが、それと同時にあんな小さいものが何万人という多くの被爆者を苦しめたと思うと、呆然と立ち尽くすだけだった。」

「平和の泉の正面の黒い石碑には、『のどが渴いてたまりませんでした』という一節が彫り込まれていた。水の上に油が浮いていたが、のどの渴きが我慢できず飲んだそうです、という説明を聞いた時は、本当に心が痛くなった。」

「平和祈念像は、なぜ西洋人の男性で、あのポーズをとっているのか疑問です。平和の象徴には見えません。・・・平和運動とは、国内で像を建てるのではなく、外に向かって、こんな思いをする人が二度とないようにと訴えていくことだと思います。」この平和祈念像に対して批判的な意見を述べた者は、一人ではなかった。「長崎に向かう電車でもらった資料に載っていた平和記念像について驚いた。何に驚いたのかというと、平和の像に6億円もかかっていたのだ。実際に実物を見て、正直こんなものに6億円もかけたのかと思った。」中国からの留学生が、いっしょに歩いていたときの会話の中で「あのたくましい男性の像ではなくて、如己堂の方が平和の象徴にふさわしいと思う」と語ったのが、私には印象深かった。

「長崎旅行で一番心に残ったのは永井博士の存在です。自分も負傷しているのにもかかわらず、多くの人々を救護し、床に伏した後も、平和を訴え続けた生き様に感動しました。それに『憎むすぎがないほど、愛し抜きなさい』という言葉に心打たれました。如己堂に行けて本当に良かったです。」

「永井隆さんの遺品・著書・写真などを通じて原子爆弾の恐ろしさを知りました。原爆が投下されなかったら、自分より先に死ぬはずのなかった妻への気持ちや子供たちへの思いをつづった色々な詩を読んで感動しました。」

5. 9日は、朝は大急ぎで、まず平和公園に向かい平和の祈りが書かれた折鶴を奉納。神戸から来た学生の一団というのでTVカメラに撮影されたが、放送されたのかどうかは不明のままである。10時30分から聖公会の三一教会の「長崎原爆記念礼拝」に出席。ここでは被爆者の体験記が朗読された(別の資料を参照)。次のような感想文がありました。

「一番印象的なものは、礼拝のときに聞いた被爆者の家族のお話です。あんなにリアルな話を聞いたのは初めてだし、本気で耳をふさぎたくなる話を聞いたのも初めてでした。ずっと忘れたいと思います。」多くの者が同じ思いであったらう。私には、被爆されて亡くなられた関係者の方々の名前が聖堂の壁面に刻まれていたことが印象的であった。

礼拝の後、すぐ近くのレストランで長崎チャンポンを食べる。午後は、市内見学に、いざ出発と思ったら、ザアザア雨が降り出した。しばらく足止めである。そう言えば「長崎～は、今日も雨だった～」なんて歌があった。なお、長崎チャンポンに関しては、「とてもおいしかった」と書いている学生もあり、たいいていの人には好評だったが、中には「とても楽しみにしていた」のに、思ったよりも「味を薄く感じ、塩・こしょうを大量に入れた」なんて人もいました。(この人、将来、高血圧になる心配がありそうですね。)

旅行の直前に三一教会の場所を地図で確認していたら、すぐ隣にわたしたちと同じキリスト教主義の女子大学である活水学院があることが判明した。それで急遽、活水学院とメールで連絡を取り合っってチャペルを見学させていただくことになった。長崎活水は、神戸松蔭よりもさらに歴史の長

い、やはりキリスト教主義の名門女子大である。この日が試験の最終日だったとかで、学生の姿はほとんど見かけなかったが、宗教主任の二瓶(にへい)教授をはじめとする教職員の方々の案内で、大小2つのすばらしいチャペルを見学することが出来た。学院の歴史が分かるように展示してある場所もあったことが記憶に残っている。学生の感想文には、以下のように記されています。

「活水学院で感動したのは、歴史を感じる西洋風な建物です。また、旧チャペルもアンティークな家具や小さなオルガン、温かな光が射すステンドグラスも素敵でした。」

「(チャペルでは)心が洗われるような光の演出が美しく、お祈り捧げるための静寂が漂う雰囲気良かったです。それに建物が松蔭と対照的だと感じました。緑の屋根にレンガタイルの壁が松蔭ですが、活水は赤い屋根に薄ページユの壁で、落ち着いた柔らかみのあるデザインでした。対照的でありながらも雰囲気や伝統が似ている大学なので、これからも交流していきたいと思いました。」

活水学院を出た後、オランダ坂を途中で雨宿りしながら、大浦天主堂に向かい見学。さらにグラバー園を訪問したのだが、私だけは活水に戻ってキリスト教教育の現状などについて二瓶教授と情報交換をしたので、学生たちが、その後どのようなフィールドワークをしたのかはよく分かりません。しかし、感想文からはその一端がうかがえるので紹介します。

「(グラバー園では)昔そのままの建築物や、生活用品など当時の生活が見られてとても楽しかった。眺めもよく、散歩も楽しめた。また長崎に来たいなと思える場所でした。」

「(グラバー園の中の)長崎伝統芸能館では、『長崎くんち』と呼ばれるお祭りの映像が放映されていた。そこには「傘鉾」という豪華な飾りなども展示されており、ぜひ生で祭りを見てみたいと思った。グラバー園の近くの坂にお土産屋があったが、カステラの試食があり食べてみると、やはり本場だけあっておいしかったし、チーズ味や柑橘系の味などいろいろあった。凍らしてあるのもあり、新しい食べ方だと思った。」

「(出島では)坂本竜馬のことを聞かせてもらったり、また鎖国時代の貿易・文化の拠点や、国際交流のことがよく分かり、今まで知らなかった長崎の歴史をよく理解することができました。」

「私はファッション・ハウジングデザイン学科ということもあって、建物には非常に興味があります。長崎へ行ったのは今回がはじめてでしたが、グラバー園や出島、活水女子大学など非常に魅力的な建築物が多く勉強になりました。特に当時の状態を復元した出島が印象に残っています。和洋折衷の館が立ち並んだ景観はとても美しいと思いました。外国文化が多く取り入れられた土地ならではの独特な雰囲気を感じました。」

この日のことに限らず、長崎の人々との触れ合いについて書いている人が多くいた。これが旅行の一番の収穫だったのかも知れない。

「グラバー園から出島に行く時、地元の方に道を尋ねると、とても丁寧に教えてくれた。」特に印象に残っているのは、路面電車を待っている時に、隣にいたおじさんに話しかけられたことで、それ自体は何も珍しいことではないのですが、兵庫県から来た事を伝えると、色々なオススメを教えてくださいました。しかし、方言なのか何を言っているのか、結局、話はほとんど分からなかったのですが、一生懸命教えてくださいまして、とても嬉しかったです。」

「道でたくさんの方にお声をかけてもらい、お話をさせてもらったのですが、被爆2世や3世の方が結構いたことに驚きました。被爆者がいて、その子孫がいて。普通の人と変わらない人たちのはずなのに、違和感がありました。おそらく(このような人々を)どこかで特別扱いしていた自分がいたからだと思います。そもそも被爆者だってみんなといっしょなのに、被爆者の方だけを特別な存在としていて、これも一種の偏見なんだろうと思知らされました。」

この日の夕食の後には、カラオケ大会もあったが、委細は省略。

朝の平和公園での式典には時間の関係もあって、ちょっと雰囲気味わっただけで、実際には参加せず、折鶴を奉納しただけで終わったのだが、長崎出身のGさんにとっては、それでも印象深かったようである。「地元民でありながら長崎の平和記念式典には参列したことはなかった。8月9日は学校で追悼集会があったためです。この式典には、被爆者や長崎市民はもちろんのこと、国内外から多数参加している人がおり、驚いた。予想以上に8月9日が注目されていることを知り、平和への思いをあらたにすることができた」と記されていた。

学生たちには宿での新しい出会いがあった様子です。「三つめ（に印象に残ったこと）は、同じ部屋の留学生の二人と、今年サークルに入ってきた後輩と仲良くなれた事です。三人とも今年、松蔭に入ってきたばかりで、まだじっくりとしゃべったことがなかったので、うまくしゃべれるか不安でした。けれど、中国の話をしたり、ガールズトークしたりするうちに仲良くなれました。それにこのメンバーで旅館の露天風呂の温泉で流れ星をみたり、部屋の窓から見た虹は最高の思い出になりました。』そういえば、私は藤井チャプレンと露天風呂につかりながら、不思議な感じの虹を見ていました。

6.10日は、午前中に長崎歴史文化博物館を全員で見学した。この博物館では長崎の歴史を集中的に学ぶことが出来るので、学生たちは熱心に見学していた。南蛮文化や中国との文化交流の歴史に興味をもった者もいた。「特にガラス製の物品は、日本に来航した中国人が日本に伝えたこと、明治時代になるまで珍重されたことに驚きました」というような感想文もあった。お昼前にいったん解散して、班に分かれて市内見学を楽しむことになった。前日の自由行動の時もそうであったが、重要地点をしっかりと見てもらうために、いくつかの質問事項を用意して、それに回答するようになっていました。

大半は新中華街で昼食をとったと思われる。この中華街については「神戸との共通点の一つであることから、町並みも雰囲気も楽しめて親近感」を感じたとある。また、「長崎ならではの長崎ちゃんぽんや、皿うどん、カステラ、角煮まんじゅう、海鮮など、おいしいものがたくさん食べられるので、とても楽しかったです」と感想文にあった。もちろんこれらは一度に食べたものではなくて、ホテルでの夕食で食べたものなども含まれている。

街で出会った地元の人に課題の質問の答えを教えてもらった人もいるようだ。移動に利用した路面電車が気に入った学生は多くいるようである。「他県でも路面電車に乗ったことがあったので、初めてというわけではなかったのですが、なぜか今回はすごく印象に残っています。ひとつは降車ベルの音です。「チン」と、どこか懐かしいような昔を思わせる音は、とても新鮮で、私が普段乗る市バスの電子音にはない良さがありました。二つ目は路面電車の車内の様子です。じっくり見ると、古い電車をそのまま使っているのか意外に古く、これまた昔を思わせる良い具合で、とても好きになりました」と書いた学生がいた。

午後4時に長崎駅に集合。この時「もう帰るの?」と漏らしていた学生のことばが、この旅行の成功を物語っているように思われます。

2010年度 神戸松蔭平和プロジェクト 活動点描

松蔭GP選考委員会より、「神戸松蔭平和プロジェクト2010」の採択通知(4月20日)
3月に書類申請した長崎旅行の計画を本格始動させる。

神戸聖ミカエル教会訪問&元町スイーツオリエンテーリングを実施(6月13日)
神戸聖ミカエル教会の主日礼拝に参列。礼拝後、神戸教区主教で本学院長でもある中村豊先生の「長崎におけるキリスト教と原爆」の講話を聞いた。学生40名、学長を含む教職員10名が参加した。

平和WEEKを実施(7月5~9日)
ヌーンサービス(昼の礼拝)に、特別講師も招き、平和について集中的に祈る時とした。
7月5日(月)「長崎とキリスト教」講話:竹田文彦先生 参加者:11名
7月6日(火)「キリストの平和」講話:藤井チャプレン 参加者:11名
7月7日(水)「西アジアの平和」講話:勝村弘也宗教主事 参加者:12名
7月8日(木)「広島原爆・被爆証言」講話:岡邊好子さん(宝塚市原爆被害者の会) 参加者:35名
7月9日(金)「隔ての壁を壊すため」講話:小南チャプレン 参加者:25名
旅行参加学生には最低1回の出席を義務付けた。

平和の折鶴(7月)
全学生・教職員に呼びかけ、平和を求める祈りを裏面に印刷した折り紙を配布・付置した。予想を上回る2000羽以上の折鶴が集まった。チャペル奉仕学生で2つの千羽鶴にし、書道部学生に書いてもらった聖句(「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。~マタイによる福音書五章九節~」)を付けた。

結団式・礼拝(8月2日)
チャペルで結団式・礼拝を行った。また、事前課題「『戦争を終結させるためには、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要があった』という意見がありますが、あなたはこの考え方についてどう思いますか。」(共通)、「長崎と神戸にはどのような共通点がありますか。」(長崎のみ)を発表し、出発日に提出させた。

広島平和旅行(8月5~6日)
公募による参加者2名が、日本聖公会神戸教区の平和プログラムに参加し、8月5日から1泊2日で、広島を訪問した。

長崎平和旅行(8月8~10日)
チャペル奉仕学生および公募による参加者19名(現地参加1名を含む)、引率教職員5名で8月8日から2泊3日で長崎を訪問した。

レポート課題(9月30日提出締切)
広島および長崎への平和旅行に参加した学生に事後レポート課題として、共通の事前課題と同じ「『戦争を終結させるためには、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要があった』という意見がありますが、あなたはこの考え方についてどう思いますか。」という問いを、再び問い直し、1000字以内にまとめてもらった。

折紙裏面に記載した祈り

松蔭GP「神戸松蔭平和プロジェクト」折鶴に込める祈り

戦争は人間のしわざです。

戦争は人間の生命を奪います。

戦争は死そのものです。

過去を振り返ることは、将来に対する責任をになうことです。

広島を考えることは、核戦争を拒否することです。

広島を考えることは、平和に対しての責任を取ることです。

(広島平和公園 原爆資料館 ヨハネ・パウロ2世)

輝いていますように 明るく太陽が いつも 世界の子供のうえに
なりひびかないように 二度と 大砲の音が

くりかえさないように 二度と 長崎の子供の悲しみを

すがって泣いた 母さんに 原子雲の下で

(長崎平和公園 平和を祈る子像)

主よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに、愛を、 争いのあるところに、ゆるしを

分裂のあるところに、一致を、 疑いのあるところに、信仰を、

誤りのあるところに、真理を、 絶望のあるところに、希望を、

悲しみのあるところに、喜びを、 闇のあるところに、光を、

もたらすことができますように

(聖フランチェスコ 平和の祈り)

長崎平和旅行のフィールドワーク課題

学籍番号 _____

氏名 _____

プチジャン神父が持ってきた大浦天主堂の MARIA 像について質問します。聖母 MARIA に抱かれているイエズス（イエス）さまは、どうしていますか？

「オランダ正月」というのは何ですか？

坂本龍馬の写真を見たことがあると思いますが、この写真を撮影したのは、どこのだれでどんな人だったでしょう？

江戸時代出島に滞在したカピタンとはどんな人でしたか？

エレキテルとは何のことでしょう？（出島）

江戸時代、長崎奉行は幕府にとってどんな意味を持っていましたか？

「私はキリシタンです」とうそをついて、わざとつかまり、長崎までの旅費をうかせた男がいました。この男はどうなったでしょう？（長崎歴史文化博物館）

長崎と言えばカステラですが、老舗として有名な店を 2 つ挙げなさい。また、カステラの原料は何でしょうか？

活水学院の「活水」は聖書のどのことばから取られていますか？

プッチーニの歌劇「蝶々夫人」のマダム・バタフライ役として、ヨーロッパで大活躍した日本人女性とは誰でしょう？（グラバー園）

日本で最初に本格的英語教育が行われた場所は、どこにありましたか？また、どんな人が日本人に英語を教えましたか？

長崎平和旅行および広島平和旅行の参加学生のレポート

長崎平和旅行および広島平和旅行の参加学生のレポート

課題:「戦争を終結させるためには、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要があった」という意見がありますが、あなたはこの考え方についてどう思いますか。1000字以内にまとめなさい。

この課題に答えるためには政治的な価値判断をする必要があるので、回答者の氏名が特定できないように匿名にした。

Aさん

「戦争を終結させるためには、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要があった」という意見について、これはアメリカ人側の代表的な考えであり、偏った意見だと感じます。しかしそれが悪いということではなく、加害者と被害者では評価が一致しないのが当然だと思いました。

アメリカにしてみれば、原爆投下という方法で敗戦を早めたことと、旧ソ連との戦争を防いだと考えれば正当とみなして当然であり、被害を受けた日本にしてみれば、そんな正当論は言い訳にしか感じない、誤った非道な行為と見なすのが自然です。原爆投下によって戦争が早く終わり、長く続くより犠牲が少なくなったという考えは、確かにその通りかもしれませんが、しかし、この「少なくなった犠牲者」とはアメリカの兵士のことです。アメリカ側にとっては、日本人が何人亡くなることになっても、自国兵士の犠牲が少ない方がいいに決まっています。徴兵された家族を持つ人からすると尚更なので、原爆2発で家族が死なずにすんだなら、それは正しいことです。一方で日本側から見ると、国民を無差別に納得することができません。民間人の大量殺人は確かな法的違反であり、本来軍人よりも優先して保護されるべき存在なので尚更だと思います。

戦勝国と敗戦国とでは、当然価値基準に相違があります。アメリカにアメリカの、日本には日本の言い分がある。それを公平に固執せず判断することが、私たちがこの先の私たちの課題だと思いました。

Bさん

私はこの意見については賛同できないが、「必要があった」と発言している人々がなぜそのような気持なのかは理解できる。理解することはできるが賛成でもないし反対でもない。あくまで一個人の意見として理解するだけである。戦争が終わるためには何をすべきか、と問われれば、もちろん全ての国の全ての人間が武器を捨てて手を取り合うことなのだが、これができないから武力行使をする。その結果が世界大戦である。アメリカからすれば戦争を終結させるための武力行使が原子爆弾だったのかもしれないが、それが正しい答えだったとは言い難い。

というのも、私は戦争に正しいも反対もないと思っているからである。喧嘩両成敗という言葉があるように、戦争はどこが勝とうが負けようがそこに正義も悪もない。それは正義のために戦争をしているわけではないからである。スポーツも勉強も同じで、結果が良くなかったから悪であるということがないのと同じである。

長崎原爆資料館で見たある映像が印象に残った。多くの戦死者や被爆者の訴えについて展示されていたコーナーの横に、原爆投下はするべきだったという意見のアメリカ人の映像が流れていた。

「日本国民と日本に捕虜されていた一部の外国人(もちろんこの外国人の中にはアメリカ人も含まれている)が死ぬことによって、より多くの人々の命が守られたという意見だった。日本にいたわずかなアメリカ人の尊い命を失うことで、合衆国本土にいた多くのアメリカ人の命が救われた。」

このような内容だったが、はたしてこの意見は正しいのだろうか。確かに原爆を投下したことで戦争は終結し、以降世界大戦は起きていない。しかしこれは単なる事実や結果だけではないかと私は思う。これが正しいかどうか論点なのではなく、原爆投下については「歴史上での重要な出来事」と認識すべきである。どんな形であるにせよ、命が失われることが正解だということはあるにせよ。戦争によって失われた多くの命によって、私た

ちは改めて世界平和、あるいは戦争や武器の恐ろしさ、あるいは命の尊さを再認識することができるのである。

武力によってでしか守ることのできない世界を目指さないためにも、より多くの人間が原爆や戦争についてもっと知るべきであると私は思っている。現実起きたことを認識することで、命の尊さを感じてほしい。そして本当は、原爆投下に様々な意見がある中で、戦争に正しいも必要もないことを理解してほしい。

Cさん

私は戦争があった当時を生きていません。日本もアメリカもその他の国も、どういう心理状況になっていたかはわかりません。そしてたくさんの方が当たり前前に死ぬ世界で自分がどういう気持ちになるかは想像もできませんが、きっと、暴力には暴力で立ち向かわないと解決できないと思っていたでしょう。大切な人がたくさん亡くなったらきっとそうなります。けれど長崎で読んだ本の一節に「一番辛い時は、恨み悲しみに囚われてしまい神様から離れがちになってしまうが、今こそ神様のそばにいる時だ。」とありました。暴力が目の前にある時こそ、平和を考えないといけません。戦乱の中でそう言い切れるほど強さは私にはないと思いますが、そうありたいと思っています。当時そのように考えれば原爆という暴力は必要なかったはずです。

未だに「原爆を落とす必要があった。」という意見があるのは残念でなりません。結果的に言えば原爆を投下したことで日本が早く降伏するきっかけになったとは思いますが。しかし原爆を投下させる必要は絶対になかったはずです。日本はすでに降伏まで時間の問題だったはずですし、何より原爆による被害は大きすぎます。

長崎に行って思ったことは、原爆被害は原爆を落とされた日で終わらないということです。当たり前のことですが、小さな怪我でも何日もかかってやっと治ります。けれど原爆による傷はとてつもなく大きくて、治癒するのに何年もかかったり、治癒したものの後遺症が残ったり、未だにその傷を抱えて生きている人だっています。

戦いは原爆を落とされた日から始まったと言えるでしょう。たくさんの苦しみと闘っていかねばならない人たちに、「原爆は戦争を終わらせるために落とされた。」なんて言えるはずがありません。今回のプロジェクトでは多くの人たちとお話することができました。たくさんの悲しみに触れることができました。私はその悲しみを受け取ることはできても、痛みそのものは想像することでしか分かち合えません。けれどその想像が薄れることなく受け継がなければいけません。改めて、原爆は投下させる必要がなかったと言いきれます。

Dさん

私は、広島・長崎に原子爆弾を落とすべきではなかったと考える。なぜならば、落とす前に非人道的兵器だということは、理解し得ると考えるからである。確かに戦争は、敵にダメージを与え、少しでも早く降伏させることが求められる。しかし、被害をできるだけ小さく留めることが、自国にとっても相手国にとっても良いのではないかと考えられる。

専門家の意見には、「原爆投下はアメリカにとって合理的な理由で行われた。核兵器は、もとはナチスドイツ対策のため製作された。しかし、核兵器を使用する前に、ドイツは降伏してしまった。しかし、核開発は莫大な研究費用を出して行ったため、是が非でも結果を残す必要があった。また、核には当時のソ連に対し抑止力を与える効果もあった。その上、これ以上戦争を長引かせると、アメリカにとっての戦争被害が大きくなるが見えていた。そのため、核兵器は落とされるべくして落とされたのではないか。」という意見を言う者もいる。

また、被爆者の意見から世界に核廃絶の動きが高まっている。体験者だからこそ語ることでできる悲痛な想いは、世界の人々の心を動かしている。しかし、これらは結果論ではないかと考えられる。核兵器が使用されなければ、アメリカも製作した兵器が無駄になり、研究費は泡と消えただろう。このことにより、次回兵器開発に投じられる資金が減ることが考えられる。このようにして、できるだけ平和解決を進めるようになるのではないかと考えられる。何より、被爆者は心身ともに一生深い傷を負う必要は無かった。

また、核廃絶にはこのような背景もある。そもそも核兵器は、危険かつその維持費が多額である。また、核兵器は一度作ってしまうと解体することが難しく、核兵器を作り出す時に生まれる「放射性廃棄物」の処理も核保

有国を悩ませている。そして、万が一テロリストの手に渡ってしまうと、取り返しのつかないことになるのは、想像に難くない。現に、核兵器の設計書がテロリストに渡りそうになったという事例も出てきている。

しかし、このような核の被害は研究段階で分かっていたはずである。その被害を考えれば、これは非人道的かつ高コストであることが予測できたのではないかと考えられた。よって、核兵器は使用されるべきではなかったとすることができる。

武力による短期解決は、人と歴史、そして未来に深い傷を負わせる。このようなことにならないために、我々人類は理性を持ち共存する必要があると考えられた。

Eさん

私はこの意見が誰の意見なのか、どういう背景があるのか、詳しいことは分かりませんが、賛成しかねます。広島と長崎に投下された原子爆弾で戦争が終結したというのはあくまで結果論にしか過ぎないと思います。原子爆弾の投下がなかったとしても、戦争が終結していた可能性もあったかもしれないと思います。

正直なところ、私にとって平和とは考えるまでもない「当たり前なこと」です。今も尚、世界には戦争で命を落とし、家族を失い、涙を流し、怪我をして、苦しんでいる人々が沢山いることも分かっているつもりですが、どうしても直接的な関わりがないからか「どこか遠いところで起きていること」で終わってしまいます。そんな私からすると、戦争自体が武力と武力の争いではありますが、原子爆弾のように圧倒的な力の差に頼らずとも、平和的な戦争終結の方法はあったのではないかと、思うのです。

とはいえ、そういう意見があることも確かなことで。それを認めるとすれば、私は逆にひとつの疑問が浮かんできます。戦争を終結させるために原子爆弾を投下したのだとするならば、どうして広島と長崎のふたつの都市に投下する必要があったのか。最初の広島への投下だけでも莫大な数の人々が命を落としました。想像もつかない人の数です。それだけでも、日本にとってはかなりの痛手であって、力の差は充分に見せつけられたと私は思います。それでも足りなかったのでしょうか。長崎にも投下して、更に沢山の人を苦しめる必要は本当にあったのかな、と疑問に思います。

こんな風にも思いました。日本という国は世界で唯一の被爆国であり、原子爆弾の恐ろしさを身を持って体験した唯一の国です。そして、広島と長崎に投下されたことで、原子爆弾の恐怖、そしてその絶対的な力の差が世界に知らされたと思います。どちらかという、そのために原子爆弾が投下する必要があった、と考えたほうが私はしっくりきます。

今まで沢山機会はあったのに、あまり真面目に学んでこなかったのも、私には自分の考えが正しいのかどうかよく分かりません。ですが、何万という人の命を奪うことでしか、戦争終結への道がないこと、それが「必要なこと」であったという考えはやはり正しいとは思えません。そんな、人の命の犠牲の上に成り立つ平和なんて、悲しすぎると思います。

人には物を考えてそれを、言葉にして伝える力があります。それは強い武器であると思います。今も世界で行われている戦争について詳しくは分かりませんが、言葉を使って命の危険にさらされることもなく、どんな考えであっても一度に沢山の人の命を奪う原子爆弾も使わずに済むような、そんな世界になればいいと思います。

Fさん

去年は広島、今年は長崎の平和学習をして、被害者の方のお話、遺族の方の演説、平和資料館の写真、遺品などを見て、原爆投下が正解だったとは、私は思いません。資料館で見た写真で驚いたのが、原爆が落とされた付近にいた人は、一瞬で消えて影になったということでした。最初に説明されたときは、想像もできなくて、意味がわかりませんでした。それほど、原爆は自分が考えていたものよりも、はるかに未知のものであり、恐ろしいものだと思い知らされました。

あとは原爆、放射線の後遺症。被爆者で生き残ったとしても、皮膚はただれているし、放射線で後遺症がでる

方もいます。もし、それが自分だとしたら、生き残ったことを後悔し、原爆投下を憎く思うと思います。あんなにも威力、破壊力があるものは人間がつくるものではない、と展示物に書かれていたのを覚えているが、本当にその通りだと思います。

また、当日の平和公園の雰囲気を見ると、なんか独特な雰囲気がありました。被爆者の人や、被爆者の遺族は周りにいないので、その雰囲気に負けそうでした。あの雰囲気からも、原爆の投下が正当化されているようには思えませんでした。被爆者も遺族も、これ以上原爆を投下させてはいけないと言っている通り、そういった雰囲気が漂っていたように思えた。

資料館で見た、各国の核兵器の所有数や実験回数を見たときは驚きました。何ヶ国かが核兵器を所有しているのは知っていたが、あれだけの数を所有していて、所有しているだけでなく、数回の実験をしていることに驚きました。日本の被害を見ていたはずのアメリカが、あれだけの数を所有していることが不思議で仕方なかった。あの表を見たときに、核兵器は戦争だけのために作られたのではなく、他に理由があるのではないかと考えた。日本に投下したのは、戦争を終わらせるためよりも、核兵器の実験であったと聞いたことがあるが、そんなために投下したとされるなら、信じられないです。

なので、終戦させるためには確かに投下せざるを負えなかったかもしれない。けれど、そこまで破壊力の強いものをつくるべきだったとは思いません。原爆投下ではなく、他にも方法はあったのではないかと感じます。もし自分が原爆の被害者になったらと考えると、本当に恐ろしくなります。核兵器所持国は、核兵器の恐ろしさを、もっと感じて欲しいと思いました。

Gさん

アメリカが日本に、第二次世界大戦を終結させるために、広島と長崎に原子爆弾を落とさなければならなかったという意見について書きます。

私は長期にわたっていた第二次世界大戦は早く終わらすべきだったと思います。

しかし、いくら日本が引き下がらなかったとは言え、アメリカが広島と長崎の二箇所に原子爆弾を落として良い訳があるのでしょうか。私は決して良いとは言えません。

私は、なぜアメリカが日本に対して原子爆弾の投下を急いだのか、よくわからなかったので調べてみました。一つは「日本をできるだけ早く降伏させ、米軍の犠牲を少なくしたかった」、二つは、「ヤルタ会談で、ソ連はドイツの降伏から三ヶ月以内に日本に参戦することを極秘に決めており、米軍はソ連の対日参戦より前に原子爆弾を日本に投下し、大戦後世界でソ連より先に立ちたいと考えていた」、

三つは、「アメリカは原子爆弾という新兵器を実戦で使い、その威力を知りたかったと同時に、膨大な費用を使った原爆開発を国内向けに正当化したかった」、です。

私は、第二次世界大戦を終わらす方法は他にもあったはずだと思うし、いくら日本が世界を敵にして日本の味方がいなくなったからといって、強烈な原子爆弾をしかも実験を兼ねて使用するなんて、持ってた他だと思いません。

今年で六十五年が経ちましたが、今もなお原子爆弾の被害により、今になって後遺症が出てきたり、親族を戦争で亡くされた方、多くの人が苦しみ悩まされているはずです。

私は今の平和な時代に産まれてきたことを本当に感謝しています。毎日いつ落とされるのかなどで不安に侵されることもないし、平和に暮らせているのが幸せだなあ、と長崎に行き、原爆資料館をはじめ様々な場所へ行き改めて実感することができました。それと同時に、今の私たちにできること、それはつぎの時代に語り継いでいくことだと思います。

Hさん

私は、戦争を終結させるために広島と長崎に原子爆弾を落とす必要はなかったと思う。結果として日本の戦争

は終わったけれど、それならばなぜ、原子爆弾を投下したアメリカは戦争をやめないのかがわからないからだ。

アメリカだけでなく、今もまだ戦争の続いている国もある。今回の長崎の平和学習に参加すれば、小学生の時にはわからなかったことが少しはわかるかと思っていたけれど、結局戦争は恐ろしく、二度と繰り返してはいけないことだということだけしか私にはわからなかった。

戦争をすることは決していいことではない。原子爆弾はさらに放射能汚染の危険性もあり、今も苦しんでいる人もいる。今もまだ戦争を続けている人はそういうことを知っているのかなと思う。日本は65年前に終戦したけれど、当時のことを語ることのできる人が、だんだん少なくなってきている。私自身体験したわけではないから、原爆資料館にある写真や映像を見て当時の悲惨さを想像するしかないけれど、体験だけは絶対にしたくないと思う。

小学生の修学旅行で、広島原爆資料館に行ったけれど、その時は原爆ドームの印象が強く、何があったのが全く覚えてなく兵士の像とかが、気持ち悪かったことは少し記憶にあった。長崎原爆資料館には兵士の像はなかったけれど、代わりにミサイルや爆弾の模型があり、あんな小さな物で何万にも亡くなったなんて信じられなかった。

世界中では今もまだ戦争や紛争の続いている地域があり、私よりも小さな子がライフル銃を持っている写真が雑誌に載っていたりもしている。日本は法律で銃や刀を携帯することが許されていないから、その子達の気持ちは想像しかできないけれど、大人の都合でライフル銃を持たされたりしてどんな気持ちなんだろうと思う。

私は今年初めて海外旅行に行った。リゾート地だったから平和なところだったけれど、改めて日本は平和なんだと痛感した。今から65年前まで日本でも銃を持っていた人がいたなんて信じられないくらい今の日本は平和で、日本に生まれてよかったと思った。

今回の長崎旅行の時に原爆資料館で外国人の人をたくさん見た。日本は唯一の被爆国だから、もっと多くの人々が戦争の恐ろしさを知って、世界中の戦争がなくなればいいと思った。

Iさん

私は戦争をやめさせる手段として、原子爆弾を用いるべきではなかったと思います。長崎を訪れるまでは、奇襲を仕掛けた日本にも問題があるという考えを持っていました。しかし、今回現地で原爆資料館を訪れてみて、原爆の恐ろしさを目の当たりにした時、これは想像を絶する大変な兵器だと思いました。街は全壊全焼し、市民の半数以上が熱線や爆風、放射線で被害を受けた事実を写真や展示物で見ていくうちに、原爆の底知れぬ威力が徐々に伝わってきました。さらに今も苦しむ被爆者の方々のメッセージをパネルで読んだ時、二度と同じ事が起きてはならないという共通の願いが感じられました。

私はこれほどまで多大な悲劇をもたらした原爆を含む核兵器を、未だに保有している国がある事を信じ難く思います。核兵器が無くなる理由として、自国の安全を保つためであるという事が挙げられていますが、兵器は持っているだけで戦争の引き金になると私は考えます。一方の国が核兵器を使えば、被った側の国も核兵器で仕返しをするでしょう。保有数最大のロシアとアメリカが争うような事になれば、日本よりもっと多くの犠牲者が出るのは想像するまでもありません。国を守るためのものが結局は自国と他国両方を傷つけるものであるならば、すぐにでも手放すべきです。そもそも戦争を基準にして兵器で守ろうとするその考えこそ誤りなのだと思います。

もし兵器の代わりに国を守り、戦争をも防ぐ手段があるとするならば、それは交渉だといえます。人は話す事ができるので、武力でねじ伏せるのではなく、十分な交渉の機会を持ち、戦わずして問題を解決する術を使う事ができれば、少しずつ平和な世界へ近づいていくことでしょう。

原爆投下を単なる悲しい出来事で終わらせないために、当時無実にもかかわらず亡くなっていった方々の死を無駄にしないために、これ以上核兵器による犠牲者を増やさないためにも、より多くの人々が原爆の恐ろしさを学び、平和に対する意識を高める事が核兵器廃絶へつながるのだと思います。

Jさん

私は、長崎と広島に原爆は投下する必要があったと思う。大きな理由として2つ挙げる。1つ目は、被害はどうであれ終結に導いたものであること、2つ目は他国へ平和について語りかけるきっかけとなる。

まず1つ目であるが、原爆というものは圧倒的な力であり、その力により戦争終結という道しか残されていない状況を作ることができる。実際、原爆の被害は放射熱により骨も残らなかった人、ひどいやけどを負った人、川など水の上に浮かぶ死体、鉄をも溶かし、一瞬にして焼け野原になった街など書ききれないほどある。この脅威な威力をもつ原爆を2回も落とされればさすがに日本も降伏するしかあるまい。ここでそれはたくさんの人の死という犠牲があっても必要なことなのかと疑問に思う方もおられると思う。

では、仮にもし広島にも長崎にも原爆が投下されていなかったら現在はどうなっていただろうか？当時の日本を振り返ってみると「欲しがりません 勝つまでは」「お国のため」「名誉ある死」「特攻隊」など個人の尊重などなく、人ひとりの命があまりにも雑に扱われている。そして日本は富国強兵を目指し、日露戦争、日中戦争で勝ち、強いと信じられていた。このことから日本が敗戦するとは考えず、原爆が落ちなければ自分たちの力を過信し、いまでも他国と戦争中かもしれない。実際、終戦宣言した時の日本国民は、日本が負けたということを信じられない人もいた。嘘だ、日本が負けるはずがないと感じるのはその時代による一種の洗脳である。

戦後、日本は日本国憲法第9条に戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認という項目を作った。これは原爆が生んだ悲惨さ、戦争からは何も生まれないということ、身を持って体験したからこそできたのではないのだろうか。

次に2つ目であるが、原爆の被害がどのようなものかわからない他国の人に、原爆の現実を教え世界平和に導く資料の1つとなっている。実際に朝日新聞の2010年8月6日の記事に国連のバンギムン事務総長は長崎訪問によって『核廃絶の決意が強まった』と述べている。このように原爆または戦争の傷跡を世界各国へ発信し平和の大切さを伝えていく役割を持っている。

このように述べたが、あくまで客観的に、変えられない事実があるとして考えた場合である。主観的になれば、原爆など落とす必要などないと考えるであろう。大切な人がこの世から消えてうれしい人などいないのだから。人間とは矛盾している生き物だと思った。

Kさん

私は、戦争を終結させるために、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要はなかったと思います。

まず、広島と長崎に原子爆弾を投下した理由として、『日本をできる限り早く降伏させ、米軍の犠牲を少なくしたかった』、『原爆投下がなかったら日本列島での本土決戦となり、そうなれば、米軍側にも日本側にもより多くの死者が出ていたに違いない。原爆には、戦争を早期に終結させる効果があった』というのがありますが、『アメリカは原爆という新兵器を実戦で使い、その威力を知りたかったと同時に、膨大な費用を使った原爆開発を国内向けに正当化したかった』、『アメリカが戦後の米ソの対立を有利にするため』、『原子爆弾の実験のためドイツやイタリアは白人だから殺したくないが、日本は黄色人種だから原爆を落とす必要があった』などの理由を正当化するための口実のような気がします。

広島に原子爆弾を投下した時点で国民には日本が戦争で劣勢にあることは知らされていなかったけど、本土決戦をするには軍部や政府の上層部は準備不足や食糧問題により本土決戦が難しいと判断していたようなので、長崎に原子爆弾を投下しなくても日本が降伏する日は近かったのではないかと思う。

これらのことから、広島と長崎への原子爆弾の投下は結果的に終戦を早めた理由の1つであり、なかなか降伏できずにいた日本が降伏するきっかけになった出来事ではあると思うが、広島と長崎に原子爆弾を投下する必要はなかったと思います。

Lさん

私は先月行った長崎平和旅行で、たくさん学んだことがありました。どれも初めての貴重な経験だったので、

自分自身も大きく成長できたかと思います。これまでに幾度も、戦争のことについては勉強してきたつもりですが、今回の旅行ではあの65年前の長崎を目の当たりにしたので、何とも言い難いような気分になりました。

もし、自分自身が当時の長崎に住んでいて被爆された町並みを見た時、何を思って、何を感じ、どういう行動を起こしていたかと考えてみた時に、この長崎に何故、原爆を落とす必要があったのか。その怒りが沸々と込み上げてくることだろうと思います。

そして、何故私たちがこんな目にあわなければならなかったのか、こんな酷いことをするのかという思いにかられることだろうと思います。

これはもちろん、長崎だけではなく、広島でも同じことが言えると思います。このような、最中で被爆者の人々は何を希望とし、何の為にこの65年の歴史を刻んできたのでしょうか。

ほとんどの方が被爆死した中で、奇跡的にも生き残った人たちは、自分の人生の一部があの時で止まっていることだろうと感じます。永遠の11時2分と同じで、あの時から65年経ったとしても、被爆者の方々の中では65年前のままなのだと思います。

自分の人生の中で、戦争にあって、原爆という脅威な物を落とされ、過酷な運命を辿る人は、世の中そうそういないと思います。もし私自身がそんな運命だったとしても、予想だにしていないことだろうと思います。そんな風に人の運命は、人がちょっと起こした事で人生が大きく変わってしまうことになるんだなと思いました。

生きている中で、一番最低で最悪な悪事を謀ったアメリカ軍は、同じ人間として一生許されることのない行為をしました。人が人を殺すというのは、例えどんなことがあろうとしてはいけないのです。そんな簡単なこともわからなかったのかと思うと無念と悔しさでいっぱいです。

決して広島と長崎に原子爆弾を落とす必要はなかったはずなのに、候補であがっていた大阪や新潟、九州地方の熊本なども、もしかしたら落とされていたかもしれません。だからアメリカ軍が当時の長崎の地上にまで来た時に、霧が出てきて雲行きが怪しくなってきたことを理由に引き返そうとしていたのは、他の都道府県でも爆弾を落とすことが可能だったからだと思います。その時々の上空と判断しながら、長崎に落とすことを決定したのだと思います。なので、もし大阪に原爆が落下されていたとしたら、今の私は絶対にいません。生まれてくることもありませんでした。

だから、今私がこうして生きていられるのは、本当に奇跡的なことであって、当たり前なことなのではないのです。

この命は当時の広島や長崎が被爆されて、尊い命を奪われた方々の分まで、生きるべき命なのだと思います。

今回の長崎平和旅行を終えて、今の日本は本当に平和だと思いますが、世界ではまだ多くの戦争をしている国があります。この世界の人々に一刻も早く戦争が終結して、二度と戦争が起こらない『平和な世界』が来ることを祈り続けていようと思います。

Mさん

まず原爆を投下したことによるメリットを以下に述べる。

原子爆弾投下によって、それまでアメリカと対等だと信じていた日本国民が圧倒的な武力の差に気付いた多くの犠牲者がでたことによる、これ以上戦争を続けてはならないという意識の高まり

この時点で降伏しなければ、より多くの犠牲者がでていたかもしれない

まずこの3つがあげられるだろう。

しかし、「私は原子爆弾と投下する必要があった」といはいくらでも思えない。上記のようなメリットは理解できるが、納得することはできないのだ。その理由は大きく4つある。

日本の敗北はすでに目にみえていたことであり、わざわざ原爆を投下する必要はなかったのではないか。

現在でも後遺症に苦しむ人々がおられる

原爆が投下され多くの犠牲者がでたにもかかわらず、人類はそこから学べていない

・その後多くの国でより強力な水爆が開発・実験遂行されている。

・日本国内では記念碑が建てられたり、平和学習が盛んに行われているが、被害にあった国にこれらをしてほとんど意味が無いのではないか。アメリカや核保有国に対して訴えるべきなのにこれをしていない自分の身内が被爆者であっても、やはり原爆投下は必要であったといえるだろうか。実際にそれで戦争が終わったとしても、何か腑に落ちない気持ちになりはしないか。

原爆資料館に、当時捕虜として日本にいて実際に被爆した西洋人に対するインタビュービデオがあったが、「それでも原子爆弾は必要だ」という見解であった。彼からは戦争に対してではなく、日本に対する怒りを感じた。武力は負の感情を生むだけで、真に人の心を動かすことはできないのではないか。ジョン・レノンの「イマジン」を聴くと、多くの人がピースフルな気持ちになるように、良心に訴えかけたり感動を生むことが、最も平和への近道ではないかと私は思った。

Oさん

私はその意見に怒りを感じました。何故、戦争に関係のないお年寄り、子供、女性等の何十万もの一般市民を犠牲にしなければいけないのか。広島に原子弾を落としてもなお長崎にも落とすのか疑問に感じました。少なくとも長崎にまで落とす必要は絶対に無かったはずだと思います。

また、「1000万人のアメリカの青少年の命を守る為」とも述べていましたが、その頃の日本の崩壊寸前の戦力でどう考えてもあり得ない事です。戦争を終わらせる一つの手段というのも100%間違っているとも思いますが、(実際に日本がポツダム宣言を受け入れ戦争が終わったのも事実)それよりも戦争終結を前提とした原子弾の威力を知る為の実験、そして世界に自分の力を見せつけるアメリカ政府のエゴだらけの理由の為に落とされたのだと思いました。この矛盾だらけの意見は原子弾を落としたアメリカの言い逃れにしか聞こえないです。今、世界で核を無くそうという運動がありますが、それならば原爆の犠牲になった方々にもっと遺憾の敬を表してほしいです。そして反省の態度も見せてほしいです。

今年初めて国連の事務総長の藩基文氏が長崎を訪問しました。その事は長崎にとってとても大きな事だと感じました。広島や長崎に原爆が落とされてからもう、60年以上も経過しています。被爆者の方も言うておられましたが、この惨事を風化してしまう事は平和な社会でありつづける為には非常に危険な事です。なので、戦争自体を体験した方々が少なくなっている中、藩事務総長が訪問した事は、日本だけでなく、世界中の人々が平和について考えてもらえ、原爆の恐ろしさや悲惨な状況も知ってもらえる機会でもあります。この機会を気に国々の代表の方々と話し合っ欲しいし、平和について考えてもらいたいです。そして、国民にも訴えて欲しいです。

この平和学習で改めて平和について考えさせられました。また、どうすれば核の廃絶に繋がるかも同時に思いました。核は人類が作り出した大きな罪です。誰一人として無関係な人はいません。核兵器が地上にある以上、再び使われる可能性は1%でもあるのだから私達人類がこの殺戮兵器を無くさないといけません。その為にも私達はその意志を継いで廃絶や平和を訴え続けたいといけなないと思いました。

Pさん

私は戦争を終結させるために広島と長崎に原子爆弾を投下する必要はなかったと思う。

1945年8月6日、広島上空で原子爆弾が放たれ、瞬時に6万6000人が死亡し、市の60%が崩壊。最終的に、20万人もの人々が死亡した。そしてつづく8月9日、長崎にも原子爆弾が投下され、市の人口の2/3が死傷した。戦争は長引いており、アメリカには経済的な面でも食料的な面でも余裕はあったが、日本はそうではなかった。配給制度はあったが、1人に回ってくる量はわずかな物であったと聞く。武器などに使用する金属も輸入できる状態ではなく底をつき、市民から鍋などの金属を回収していたという。また、戦死した兵士も数えきれず、小学生まで兵士の訓練をさせられていたと言うので驚きだ。数々の面から日本は窮地に立たされていたが、国民はその事を知らされず必ず日本が勝つと洗脳され、それを信じていた。もし、あのまま戦争が続いて

も当時の日本政府はすんなり降伏するとは思えないし、最終的にも決していい結果になったとは思わない。いずれ食料が尽きて国全体が駄目になってしまうのではないかと思う。犠牲になるのはいつも国民からだ。まず、アメリカとしては当時開発されたウラン型原爆とプルトニウム型原爆を投下して実験し、ソ連を牽制したかったのだと思う。それにアメリカ自体も戦争で兵士をかなり多く失っている。戦争を早く終わらせたかったのは本当だろうが、原爆の実験、ソ連の牽制が本当の目的だと私は考える。広島に原爆が落とされてから長崎に原爆が落とされるまでの期間は3日という短期間だが、これは3日の間に日本の降伏によって原爆の実験を妨げられなかったと考えれば納得がいく。それに、原子爆弾を投下しなくても日本との戦争を終わらせる手立てはあったんじゃないかと思う。

よって、アメリカの都合で原子爆弾を投下された要因が大きいと思うし、戦争を終結させるために広島と長崎に原子爆弾を投下する必要はなかったと思う。

Qさん

長崎旅行の事前課題でも答えた通り、戦争を終わらせるために原子爆弾を投下した事は仕方のないことだと思うし、これが最も良い方法だったのではないかと思う。その理由を問われるとうまく答えられないが、当時の人間が本当に戦争を終わらせようと考えて出した最善の策が原子爆弾の投下だとしたら、それで良かったのではないかと思う。

今回の旅行では、小学生以来原爆資料館には訪れた事は無く（広島原爆資料館）当時はただおもしろ半分での見学だったので、9年ぶりに資料館を訪れて、あんなに生々しい写真が展示してあった事を始めて知った。また、核実験をしている映像、溶けたビール瓶に着いた手の骨など原爆の恐ろしさを知る事が出来た。特に印象に残っているのは戦争体験のVTRとその近くにある体験文章だ。読んでいただけで頭の中で想像できてしまって、恐ろしくて泣いてしまった。本当に良い経験が出来たと思う。驚いたことは、資料館には多くの外国人が訪れており皆真剣に展示物を見て、熱心にガイドの話聞いていた事だ。その後も教会での礼拝とそこでも戦争体験を聞き戦争の惨さを実感できた。

日本には戦争について知る機会がたくさんある。小学校・中学校での平和学習、原爆投下時に合わせた黙祷、毎年夏になるとテレビなどで戦争映画を放送するなど…。原爆が投下されてもう65年が経ち戦争を体験した人間はだんだん少なくなっているため語り継ぐ事が難しくなっている今こういった機会がある事がとても大切だという事を実感した。

戦争から日本は非核三原則を考え出し、戦争は二度と繰り返してはならないことだと考えるようになった。これから、日本に戦争の酷さ、当時の日本人や日本に捕えられていた朝鮮人が受けた「負」だけでなく、戦争を経験し二度と繰り返さないよう戦争について考えさせられる機会を与えられた「正」の部分も戦争がもたらしてくれたという事が感じられるため、原子爆弾を投下することは結果的に良かったのではないかと思う。

だが、原子爆弾の威力を知る実験のために日本に落としたのだがそれを別として考えても、原子爆弾まで開発するほどの能力が人間に備わっているのなら、原子爆弾を投下せずに戦争を終結する方法を探す能力だってあるはず…。そう考えると、爆弾を投下した事はしかなのしないことだと思う反面、他に方法はあったはずだと考えてしまう。

Rさん

「戦争を終結させるためには、広島・長崎に原子爆弾を投下する必要があった」という意見について、私はその考え方については間違っているという思いが強いです。アメリカは原子爆弾を投下することによって戦争を早期終結させ、数万人の若いアメリカ兵の命を守ったなどといっている色々な記事を読みましたが、それはただの言い訳にしか聞こえません。アメリカは日本が負けると分かっているのに、あえて2種類の原子爆弾を広島と長崎に投下しました。それは、2種類の原子爆弾がどれくらいの威力を持っているかの実験で日本を利用し、その上

世界にアメリカの力をみせつけソ連に対して牽制したかっただけではないかと思えてなりません。原子爆弾の実験はニューメキシコの砂漠で成功していたという記事も見かけました。ということからアメリカは原子爆弾によってどれぐらいの被害がでるのかは分かっている上で実際にどのような被害が出るのか調べるために原子爆弾を投下したのだと思いました。確かに原子爆弾投下によって日本の無条件降伏につながり、ソ連の北海道侵略・占領を防いだのかもしれませんが。ですが、日本は原子爆弾を投下される以前から負けを認めているという意思がありました。そんな日本に対して原子爆弾を投下する必要がどこにあったのか疑問でなりません。戦争を早期終結させたといってもたった数日だったかもしれないのに、その数日の間に戦艦の上でもなく、軍隊の上でもなく、軍事施設の上でもない広島・長崎2つの都市の約何十万人という市民の上に原子爆弾を投下し、約20万人以上の市民の命を奪っただけではなく、今もなお多くの人々の心身にわたって苦しめ続けています。そんな残虐な行為のどこが正しかったのか私には分かりません。被害に遭われたたたくさんの人々の中にも戦争を生きて終え、何かに脅えることもない平和な生活を送りたいと今では私たちが当たり前のように送っている生活を幸せな未来のように自分たち自身が送りたいと願っている人々いたかもしれません。それに戦争を終えて生きて帰ってきた人々が原子爆弾によって故郷を吹き飛ばされ無残な故郷の姿を目の当たりにし、自分ではなく家族の死という現実を受け入れなくてはいいなかった状況に対しての悲しみも悔しさも戦争や原子爆弾という地獄を経験していないし、戦争についてもまだ一部分しか勉強しきれない私にとって想像しきれない思いです。それにアメリカに対しての思いも偏見が多々混じっていますが、原子爆弾は絶対に投下してはいけないものだったと私は思います。

Sさん（広島を訪問）

原子爆弾を落とさなくてもかならずや済む方法はあったと思う。

その一つとして、現代では、外国同士の話し合いが不可欠で、そのコミュニケーションの中でお互いの言い分を理解し分かり合うことが大切になります。勿論、外国との対話は今後も重要な課題であり、積み重ねていく必要がある。だが、実際の歴史はそうでなく当時の戦争を終結するには、原子爆弾を投下し多くの犠牲者を出すまで止めることがなかった。今の日本は、こういった歴史や、今だにガンや白血病などの後遺症で苦しむ人々から、原爆の投下も勿論戦争もやっちはいけないことを気づくことができたはずである。

しかし、戦後60年たった今、このような歴史を証言する方が、高齢になり原爆の話語り継ぐことが困難になっていると危惧される。そのせいなのか、ニュースに目を向けると、以前、非核三原則の「持ち込まず」に違反し、内密に核が持ち込まれたり、また、政治家の討論番組を見ると、軍隊は必要、日本も核を持つべきだと言う意見もある。私はこれらを目にすると日本は何を学習してきたのだろうと感じる。アメリカの様な大国と一緒に進んで行ったら、物事が簡単に行き、日本の力も保てるかもしれない。しかし、仮に核を持っていれば、それを使用する可能性がないとは言えない。それらを防ぐために、核の恐ろしさ、戦争の愚かさを語り継ぐことが大切である。

この平和学習の後、再び家族で広島に行き、原爆死没者追悼平和祈念館に行ってきました。生前『むご過ぎて語りたくない』といていた祖父の被爆体験の本にもやはり、最後に『そのことについてはあまり語りたくない。』と書かれてありました。なぜ祖父が語りたがらないのか、祖父の妹さんの話を聞くまでは、私には理由が明確に分からなかった。

祖父の妹さんに私が『そのことについてはあまり語りたくない。』としか書いてありませんでした。」と言うと、「『そのことについてはあまり語りたくない。』程つらい出来事で、簡単には口にできないことなんだよ」と。

もしかしたら、この言葉こそがショックな出来事を語る重要な言葉なのかもしれない。つまり、祖父なりに語り継いでいたのだ。

このように、多くの民間人を巻き込んだ原爆は、投下するべきではなかった。アメリカ側は、原爆投下によって多く民間人を殺した。それは、正義ではなく罪である。

Tさん（広島を訪問）

この考えは俗に、アメリカ側の意見だとされている。見方によれば一理あるのかもしれない。原子爆弾が落とされなければ、強情な日本は降伏を渋り、戦争はより長引いていたであろう。そう考えると、原子爆弾の投下が無ければ、8月15日という日に戦争は終結しなかったようにも思う。アメリカ兵が本土上陸し、もっと多くの犠牲者を出しても、日本は降伏せずに、戦争はずるずると続いていったのかもしれない。

ただし、これは原子爆弾を正当化するためのアメリカの口実である、という意見もよく耳にする。アメリカは、戦争を終結させるためではなく、ただ新兵器である原子爆弾の実験をしたかっただけだ、と。本当は、日本はすでに降伏の準備をしていた。さらに、米軍の判断では、日本はB29の爆撃で、年内には降伏すると判断されていたのだという。それなのに、アメリカは広島へ原子爆弾を落とす。広島の被害で、日本はさらに降伏の準備を進めていたのに、3日後に長崎にまでも落とすのだと。私は小学校か中学校の授業で、「敗戦が確実だったのに、日本はいつまで経っても降伏しなかった。戦争を終わらせるため、日本を降伏させるために、原子爆弾を広島に落とす。しかし、それでも日本は降伏しなかったので、アメリカは仕方なく長崎にも投下した。この被害を受けて、日本はようやく降伏することを選んだのだ」と教わり、それを長い間、鵜呑みに信じていた。だから、上に書いた、別の見解を初めて知ったときは衝撃を受けた。どちらが正しいのか、というのは、実際のところは誰にも分からないことなのだろう。歴史や戦争の見解は、国によって、立場によっていくらでも変化する。ただし、どちらにせよ、広島と長崎にいた人々を、原子爆弾によって苦しめたという非は、アメリカだけでなく、日本にもあるのだろう。原子爆弾という存在が肯定されてはいけない、ということには変わらない。原子爆弾は、一瞬であまりにも多く、一般市民の犠牲者を出した。今もなお、被爆の後遺症に苦しむ人々も大勢いる。決して、認めてよい存在ではないのだ。戦争を終わらせるためであろうと、敵国への抑制のためであろうと、いかなる理由であっても、核兵器の、原子爆弾の使用も、開発も、行われてはならないと、強く思う。

松蔭GP:長崎平和旅行スケジュール 2010/08/08~10(2泊3日)

<p>8/8(日)</p>	<p>8:15 JR新神戸駅 集合</p> <p>8:35 のぞみ99号博多行</p> <p>11:20 かもめ19号長崎行</p> <p>13:22 JR長崎駅着(荷物をホテルのバスに預ける)</p> <p>平和公園~原爆資料館~浦上天主堂</p> <p>18:00 長崎駅 ホテル</p>	<p>朝:×</p> <p>昼:(駅弁)</p> <p>夜:</p> <p>泊:ホテル清風</p>
<p>8/9(月)</p>	<p>9:00 ホテル出発(バス)(ホテルからお茶1本プレゼント)</p> <p>9:45 折鶴献納[平和公園]</p> <p>10:30 長崎原爆記念礼拝 聖三一教会</p> <p>12:00 LUNCH 長崎ちゃんぽん or 皿うどん</p> <p>13:00 フィールドワーク</p> <p>活水学院、グラバー園、オランダ坂、出島、居留地散策</p>	<p>朝:</p> <p>昼:</p> <p>夜:</p> <p>泊:ホテル清風</p>
<p>8/10(火)</p>	<p>9:00 ホテル出発(バス)</p> <p>(ホテルからお茶1本プレゼント。荷物は、ホテルに預けて長崎駅で受取)</p> <p>Aコース(長崎の江戸時代の文化を巡る)</p> <p>Bコース(長崎の食文化を巡る)</p> <p>16:00 長崎駅集合</p> <p>16:25 かもめ36号博多行</p> <p>18:25 のぞみ46号 新神戸 20:45 着</p>	<p>朝:</p> <p>昼:×</p> <p>夜:×</p>

時間厳守

持ち物:ながさきへの旅(平和読本)、着替え、歩きやすい靴、タオル、帽子、常備薬等

～長崎旅行のスナップ～



出発前、新神戸駅にて



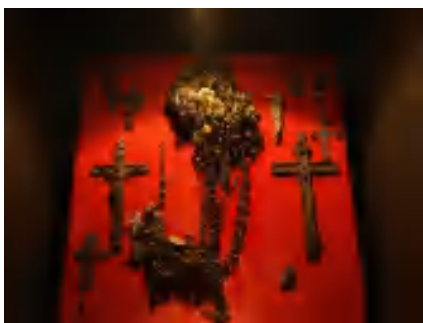
名物「かもめ弁当」



長崎到着、路面電車で平和記念公園へ



原爆資料館



高熱で溶けたロザリオ



展示に見入る学生



落下中心地で祈りを捧げる



国連事務総長・潘基文氏の献花を発見



爆心地の地層を見学



平和祈念像をバックに記念撮影



如己堂・永井隆記念館



浦上天主堂と爆風で落下した鐘楼



浦上天主堂前にて



夕食のご馳走を前にフィールドワーク課題発表

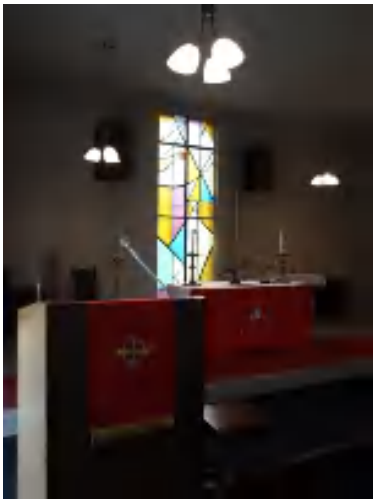


翌朝、再び原爆記念公園へ



平和の祈りを捧げ、千羽鶴を献納 「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」





長崎聖三一教会



長崎聖三一教会信徒の原爆犠牲者



全員で「長崎ちやぼん」の昼食



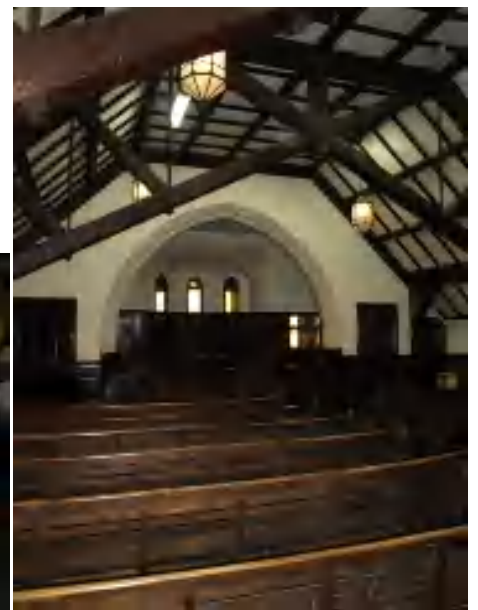
活水女学院を訪問



チャペルを見学



旧チャペルのオルガンを弾かせていただく



旧チャペル



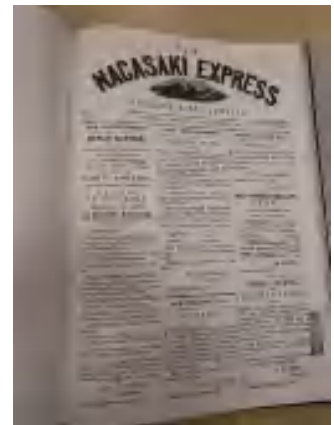
美しい活水のキャンパスを後にし、浦上天主堂へ。 プチジャン神父と隠れキリシタンとの出会いや明治になってからの迫害「浦上六番くずれ」の説明を藤井チャブレンより聞く。



雨もあがり、グラバー園でグループ毎に自由行動。

フィールドワークの「答え」も。

最終日は長崎文化博物館見学の後、フィールドワーク課題の答えを見つけながらグループ毎の自由行動。



博物館内の長崎奉行所

閲覧室で課題の正解を探す。

開国当時の資料も閲覧できた。

2010年度 「松蔭 GP」申請書 (提出日:2010年3月31日)

プロジェクト名称		神戸松蔭平和プロジェクト
1.	企画部署及び責任者	宗教センター 勝村弘也
2.	企画参加メンバー	企画内容に賛同し、協力していただける教職員(旅行引率等を含む)を公募
3.	実施時期	5月から参加者募集、研修を実施する。8月8日から(1泊あるいは2泊)長崎へ研修旅行。
4.	実施場所	本学および神戸近隣、長崎市
5.	企画の目的	3年前より取り組んでいる平和の千羽鶴折りと被爆地への折鶴献納をベースに平和について学び体験できるようチャペル奉仕学生のみならず、参加学生を公募する。身近な問題から取り組み、基督教の視点から平和・人権問題について考察し、「神戸松蔭からの平和メッセージ文」を共同作成する。 長崎原爆の日に長崎を訪問し、千羽鶴を献納。基督教伝来やミッションスクールの源流も訪ねる。
6.	企画の内容 (できる限り具体的に)	1. 身近な平和問題を考え、フィールドワーク等を実施。 例: 神戸大空襲(「ほたるの墓」を読み、夙川を歩く) 拉致問題(特別在学生の秋田美輪さんの学内広報活動等) 被爆者の体験談を聞く。(長崎原爆被爆者の松岡司祭 など) 2. 学生&教職員&チャプレンで神戸松蔭からの平和メッセージ文を作成 3. 平和メッセージ文を刷り込んだ平和の折鶴(千羽鶴を折る) 4. 原爆および基督教伝来についての事前研修を学内で行う。 5. 平和祈禱週間のヌーンサービスに参加 6. 長崎原爆の日に平和公園に千羽鶴を献納。 7. 長崎の教会堂、キリシタン関係の遺跡等を見学 8. 以上の取り組みをまとめて報告書を作成する。
7.	対象者	チャペル奉仕学生および一般学生に公募する。
8.	参加予想学生(対象者)数	40名
9.	必要経費 ~省略~	~省略~
10.	期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・環境問題と共に平和問題については、女性の立場や意見が非常に重要であることを認識してもらう。 ・基督教の立場から平和問題について知ってもらう。 ・身近なフィールドワークや原爆の日に被爆地を訪問することによって平和の重要性について「体感」してもらう。 ・参加者には、旅行費用補助をするが、研修および事後報告を課して単なる物見遊山に終わらないようにし、自分が感じたこと、考えたことを表現する訓練ができる機会ともする。

(注1)できる限り具体的な記入が望ましいが、2.~4.の項目は申請時点で未定であればその旨記入してください。

(注2)記入欄不足の場合は、適宜用紙を追加してください。必要と思われる参考資料があれば、添付してください。

長崎平和旅行参加者大募集！8/8～8/10

長崎平和の旅のご案内

歌劇「蝶々夫人」の舞台ともなった美しい港町・長崎はザビエルの訪れた昔から、常に世界へと開かれた日本の窓でした。スペイン、ポルトガル、オランダ、中国から商人がやってきました。鎖国の終わった幕末にはイギリス、フランス、アメリカからも商人や宣教師がこの地を訪れ、日本の変革を目指す若き志士たちに文明の息吹を吹き込みました。しかしまた、長崎は信仰の道を通ったキリシタンたちの殉教の地でもあります。そして1945年8月9日にはこの町の上空でアメリカ軍の投下した原子爆弾が炸裂し、数万の人々が一瞬にして殺害されました。被爆は単なる過去の出来事ではありません。現在50万人とも言われる広島と長崎のいわゆる「被爆二世」は今なお放射線の後遺症に苦しんでいます。被爆した浦上天主堂のマリア像は、戦争のもたらす悲惨さの「証人」として、失った2つの目で私たちに世界平和の実現を訴えています。

目的:

1. 平和の千羽鶴を折り、被爆地へ原爆の日に、平和記念公園に献納する。
2. 平和についての事前学習(ヌーンサービス)に参加して学びを深める。
3. 現地ではテーマ毎にグループに分かれてフィールドワークを行う。グループ毎に報告書を作成。
4. 以上の取り組みから、自分なりの「平和メッセージ文」を作成。
5. 「平和メッセージ文」をまとめて全体で「神戸松蔭からの平和の祈り」を作成し、印刷・配布します。

日程:8月8日(日)8:15～10日(火)21:00(2泊3日)

費用:¥25,000(新神戸～長崎の交通費および2泊3日5食分を含む料金、現地交通費等は各自負担)

プログラム

月/日	行程	食事
8月8日 (日)	8:15 JR 新神戸駅 集合 8:35 出発 10:55 JR 博多駅着(のぞみ 99号) 11:20 博多出発 13:22 JR長崎駅着(かもめ19号) <u>グラバー園、大浦天主堂 見学</u> (泊)ホテル清風	朝:× 昼: 夜:
8月9日 (月)	<u>平和学習</u> 平和記念公園に千羽鶴献納、浦上天主堂、原爆資料館見学。 長崎聖三一教会の平和祈願礼拝に参列。 (泊)ホテル清風	朝: 昼:× 夜:
8月10日 (火)	全員で長崎歴史文化博物館見学 その後、グループに分かれて <u>フィールドワーク</u> 16:25 JR長崎駅発(かもめ36号) 18:25 博多 20:46 JR 新神戸駅着(のぞみ46号)	朝: 昼:× 夜:×

参加要項と申込方法

要項・条件

7月5日(月)～9日(金)12時15分～45分にチャペルで行われる事前研修に2回以上参加すること。

7月5日(月)内容:「長崎とキリスト教」 講師:竹田文彦(キリスト教学非常勤講師)

7月6日(火)内容:「キリストの平和」 講師:藤井尚人(本学チャプレン・司祭)

7月7日(水)内容:「東アジアの平和」 講師:勝村弘也(宗教主事・教授)

7月8日(木)内容:「広島原爆・被爆証言」 講師:岡邊好子(宝塚市原爆被害者の会)

7月9日(金)内容:「隔ての壁を壊すため」 講師:小南 晃(本学チャプレン・司祭)

出発までに「平和の千羽鶴」を折ってください。広島と長崎のために全体で2000羽必要です。折り紙は宗教センター等に用意します。また、千羽に束ねる作業もお手伝いください。

旅行については部分参加できませんので、全行程を共にできる方に限ります。

「神戸松蔭からの平和の祈り」の作成に協力すること。(作業は後期です。日程は追って連絡します。)

フィールドワーク

Aコース(長崎の江戸時代の文化を巡る)

長崎歴史文化博物館 新地中華街(蘇州林で昼食) 出島 26 聖人殉教地・記念館 JR長崎駅

Bコース(長崎の食文化を巡る)

長崎歴史文化博物館 新地中華街(各自で店をリサーチ) 興福寺/眼鏡橋付近を調査 カステラの松翁軒あるいは福砂屋でカステラを調達 JR長崎駅

申込方法

所定の申し込み用紙に必要事項を記入し、7月9日(月)までに宗教センターに提出してください。

旅行費用は、7月5日(水)～11日(木)の期間に、本館2階事務室前の証明書自動発行機で入金し、納付書を宗教センターに提出してください。

引率メンバー(予定)

勝村弘也(宗教主事)、藤井尚人(チャプレン)、緋田吉也(宗教センター職員)、山科まゆ(宗教センター職員)

教育団体旅行扱いのため、キャンセルについては全額返金いたしません。なお、この旅行は、学生生活を活性化する取り組みとして「松蔭GP 2010」に採択されました。松蔭GPより一人当たり¥25,000程度の旅行費用補助をしています。

お問い合わせ:

神戸松蔭女子学院大学 宗教センター

657-0015 神戸市灘区篠原伯母野山町1-2-1

078-882-6124 FAX078-882-6136



企画責任者:勝村弘也

広島平和の旅のご案内

平和の折鶴を折って、広島原爆記念の日に広島平和記念公園に献納し、日本聖公会神戸教区の平和プログラムに参加しませんか？新神戸から広島往復の交通費を大学が全額負担いたします。

目的:

1. 平和の千羽鶴を折り、被爆地へ原爆の日に、平和記念公園に献納する。
2. 平和についての事前学習(ヌーンサービス)に参加して学びを深める。
3. 日本聖公会神戸教区が主催する「広島平和礼拝 2010」に参加する。

日程:8月5日(木)9:00~6日(金)10:00(1泊2日)

費用:¥6,000(ホテルでの宿泊費。現地交通費・食費等は別途必要)

募集定員:2名

プログラム

月/日	行程	食事
8月5日 (木)	10:00 頃 新神戸を出発 広島着 市電等で広島復活教会へ 13:00~朗読会 広島平和公園で平和行進 世界平和記念聖堂にて平和祈願ミサに参列。	朝:× 昼:× 夜:×
8月6日 (金)	6:15 平和公園にて原爆死没者慰霊行事に参列し、千羽鶴献納。 8:00 広島復活教会にて原爆犠牲者追悼聖餐式に参列。 終了後は各自で自由に広島観光! 夕方の新幹線で新神戸へ。	朝: 昼:×

参加要項と申込方法

要項・条件

7月5日(月)～9日(金)12時15分～45分にチャペルで行われる事前研修に2回以上参加すること。

7月5日(月)内容:「長崎とキリスト教」 講師:竹田文彦(キリスト教学非常勤講師)

7月6日(火)内容:「キリストの平和」 講師:藤井尚人(本学チャプレン・司祭)

7月7日(水)内容:「東アジアの平和」 講師:勝村弘也(宗教主事・教授)

7月8日(木)内容:「広島原爆・被爆証言」 講師:岡邊好子(宝塚市原爆被害者の会)

7月9日(金)内容:「隔ての壁を壊すため」 講師:小南 晃(本学チャプレン、司祭)

出発までに「平和の千羽鶴」を折ってください。広島と長崎のために全体で2000羽必要です。折り紙は宗教センター等に用意します。また、千羽に束ねる作業もお手伝いください。

「神戸松蔭からの平和の祈り」の作成に協力すること。(作業は後期です。日程は追って連絡します。)

申込方法

所定の申し込み用紙に必要事項を記入し、7月8日(木)までに宗教センターに提出してください。応募多数の場合は、面接等にて決定します。

現地引率メンバー(予定)

小南晃(チャプレン)、坪井智(チャプレン)

お問い合わせ:

神戸松蔭女子学院大学 宗教センター
657-0015 神戸市灘区篠原伯母野山町1-2-1
078-882-6124 FAX078-882-6136

今月のヌーンサービス 『神戸松蔭・平和月間』

みんなで「平和の折り鶴」を折って広島・長崎に届けましょう

どうして折り鶴なのですか

昭和20年(1945年)、8月6日、アメリカ軍が広島市に投下した核兵器・原子爆弾により、放射能を浴びた2歳の女の子がいました。その子の名前は、佐々木禎子(ササキサダコ)。サダコちゃんは、10年後の小学校6年の時、突然、被爆による白血病と診断され、8ヶ月の闘病の後、昭和30年(1955年)10月25日、12歳の短い生涯を終えました。サダコちゃんは病氣と闘っていたその時も、希望を捨てずに「鶴を千羽折れば病氣が治る」と信じ、薬の包み紙や包装紙などで1300羽以上の鶴を折り続けました。

この物語は、「サダコの物語」として広島市の市民にひろく知られることになり、折り鶴は、広島原爆を体験した人たちにとって、平和への祈りのシンボルとなってゆきました。「サダコちゃんだけでなく、原爆で亡くなったすべての子どもたちのために慰霊碑を建設をしよう」という子供たちによる募金活動によって広島平和公園に建設された「原爆の子の像」には「これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきずくための」という文字が刻み込まれています。今夏、神戸松蔭女子学院大学からの平和のメッセージとして、わたしたち一人一人が祈りを込めて折った折り鶴を、広島と長崎に届けます。一人でも多くの学生・教職員のみなさんの「平和の折り鶴」への御参加・御協力をお願いします。

【 平和 WEEK 特別プログラム】

《12時15分 12時45分 ・ 本学チャペル》

7月5日 (月) 「長崎とキリスト教」 竹田文彦 先生 (「キリスト教学」非常勤講師)

7月6日 (火) 「キリストの平和」 藤井チャプレン

7月7日 (水) 「東アジアの平和」 勝村 宗教主事

7月8日 (木) 「広島原爆・被爆証言」 岡邊 好子さん (宝塚市原爆被害者の会)

7月9日 (金) 「隔ての壁を壊すため」 小南チャプレン

長崎原爆記念礼拝

2010年8月9日(月) 午前10時半

(原爆投下された午前11時2分に黙祷)



日本聖公会・長崎聖三一教会礼拝堂にて

司式：九州教区主教 ガブリエル 五十嵐正司
説教：長崎聖三一教会 牧師 フランシス 堀尾憲孝
証言：「宮本家原爆受難記」 宮本文甫氏遺稿の朗読

聖 歌 237 番 「主の民らは 命をかけ」

せい
聖 語

イエスは言われた。「わたしはよみがえりであり、命である。

わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、

わたしを信じる者はいつまでも死なない。」 (ヨハネ 11:25,26)

し
詩 編 第23編

- 1 主はわたしの牧者 わたしは乏しいことがない
- 2 神はわたしを緑の牧場に伏させ 憩いの水辺に伴われる
- 3 神はわたしの魂を生き返らせ み名のゆえにわたしを正しい道に導かれる
- 4 たとえ死の陰の谷を歩んでも、わたしは災いを恐れない あなたがわたしとともにおられ、あなたの鞭と杖はわたしを導く
- 5 あなたは敵の見ている前でわたしのために食卓を整え わたしの頭に油を注ぎ、わたしの杯を満たされる
- 6 神の恵みと慈しみは、生きている限り、わたしに伴い わたしは永遠に主の家に住む
栄光は 父と子と聖霊に
初めのように、今も 世々に限りなく アーメン

し
詩 編 第90編 (1-7, 16-17)

- 1 主よ、あなたは世々にわたって わたしたちの住みか
- 2 山が生まれず、地と世界が造られる前から 永遠から永遠にあなたは神
- 3 あなたは人に「元に戻れ」と仰せになり 人は塵に戻される

4 あなたの目には千年も、過ぎ去った昨日のよう 夜回りの一時にすぎない

5 あなたは人を夢のように消し去る 人は朝ごとに生え変わる草のよう

6 朝には萌え出て花を開くが 夕べにはしおれて枯れる

7 わたしたちはあなたの怒りに焼き尽くされ 激しい 憤りに恐れおののく

16 あなたのみわざをわたしたちのうえに あなたのかがやきを子孫にあらわしてください

17 わたしたちの神、かみ しゅ めぐ そそ て わざ さか
わたしたちの神、主の恵みを注ぎ わたしたちの手の業を栄えさせてください

えいこう ちち こ せいれい
栄光は 父と子と聖霊に

はじ いま よよ かぎ
初めのように、今も 世々に限りなく アーメン

せい しょ
聖 書

ししきしゃ せいしょ ことば き
司式者 聖書のみ言葉を聞きましょう

ろうどくしゃ しょだい しょう せつ
朗読者 イザヤ書第2章 1節から

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて 幻に見たこと。終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭

として固く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民は来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから、み言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは 剣を打ち直し鋤とし、

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって 剣をあげず、もはや戦うことを学ばない。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

いのり

司式者 主よ、憐れみをお与えください

会衆 キリストよ、憐れみをお与えください

司式者 主よ、憐れみをお与えください

天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。み心が天に行なわれる

とおり、地にも行なわれますように。わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。わたしたちの罪をお

ゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。国

と力と栄光は、永遠にあなたのものです。

アーメン

司式者 主よ、永遠の平和を彼らに与え

会衆 絶えざるみ光をもって照らしてください

司式者 原爆により尊い命を失った長崎の人々を覚えて祈りましょう

世にある人、世を去った人の主なる神よ、わたしたちは今、広島、長崎に投下された原爆に

よって世を去った全ての人々を覚えて祈ります。主よ、どうか、この人々の叫びを聞き、慰

めを与え、魂の平安をお与えください。ことに次の長崎聖三一教会の犠牲者たちを覚え

て祈ります。主よ、原爆投下で亡くなった、後藤義一郎、後藤輝子、林田幸枝、林田静江、

林田 漠、林田雅子、林田明子、秦 民江、秦フジ子、伊賀由喜友、宮本富士、宮本明子、

伊達満寿美、伊達秀子、伊達 淳、伊達陽夫、田川康二、田川ツル、田川定則、石橋主枝、

た がわ さい なまえ わか さんにん およ げんぱくとう か ご な みやもと ひろし みやもとふみこ
田川 菜、お名前の分からない三人、及び、原爆投下後に亡くなった、宮本 宏、宮本文子、

みやもとひろこ みやもとともこ みやもとのりとし いじょう めい ぎせい むな てん
宮本博子、宮本智子、宮本文甫、以上29名の犠牲を空しくすることなく、みこころが天

おこな ち おこな みちび へいわ きみ しゅ
に行われるとおり、地にも行われますように、お導きください。平和の君、主イエス・

ねが
キリストによってお願いいたします。 アーメン

【 ここで献花をします 】

いま げんぱく こういしょう くる ひとびと おぼ いの
司式者 今もなお、原爆の後遺症におびえ・苦しむ人々を覚えて祈りましょう

あい いのち みなもと しゅ ひばくしゃ いま おもに お ひとびと おぼ いつく
愛と命の源である主よ、被爆者として今もなお、重荷を負う人々を覚えてください。慈しみをもって、

ひとびと しゅ かお む はげ あた しゅ ねが
この人々に主のみ顔を向け、励ましをお与えください。主イエス・キリストによってお願いいたします。 ア
ーメン

ひばく がいこく ひとびと おぼ いの
司式者 被爆した外国の人々を覚えて祈りましょう

ねが もと さき おも ぞんじ いつく ぶか しゅ ひばく がい
わたしたちが願い求めるよりも先に、わたしたちの思いをご存知である慈しみ深い主よ、どうか被爆した外

こく きょうだいしまい かお む かれ ささ めぐ あた しゅ
国の兄弟姉妹に、あなたのみ顔を向け、彼らを支え、み恵みをお与えください。主イエス・キリストによっ

ねが
てお願いいたします。 アーメン

かくへいき はいぜつ へいわ もと いの
司式者 核兵器廃絶と平和を求め祈りましょう

てん ちち かみ げんしばくだん い か おそ たいりょうさつりくへいき のこ もの ひつぜつ
天の父なる神よ、わたしたちは原子爆弾が如何に恐ろしい大量殺戮兵器であり、また、残された者に、筆舌

つく がた かんなん あた し じごく たいけん ひばくしゃ じんるい かくへいき きょうぞん
に尽し難い艱難を与えるものであるかを知らされました。地獄の体験をした被爆者は、人類と核兵器は共存

しょうげん げんざい ながさき ひろしま お げんぱく はる はいりよく
できるものではないと証言しています。しかし、現在は、長崎・広島に落とされた原爆を遥かにこえる破壊力

かくへいき せかい へいわ ちつじょ いじ りゆう ほじ しゅ せかい ひとびと
をもった核兵器が、世界の平和と秩序を維持する理由によって保持されています。主よ、どうか世界の人々の

こころ おさめ ぶりよく ちつじょいじ げんかい れきし まな かくへいきはいぜつ けつだん みちび しゅ
心を治め、武力による秩序維持の限界を歴史から学ばせ、核兵器廃絶の決断へと導いてください。主よ、

ひとびと あわ せいれい みちび たが しんらい きょうぞん もと くる とお
人々を憐れみ、聖霊をもってお導きください。わたしたちが互いに信頼し、共存を求める苦しみを通して、

へいわ じつげん しゆ ねが
平和を実現させてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

終わりに次の祈りを用いる。

かぎ あい めく かみ よ ひと よ さ ひと ぜんこうかい こ ふっかつ
限りない愛と恵みの神が、世にある人と、世を去った人との全公会を、み子イエス・キリストによる復活と

くに よろこ みちび
み国の喜びに導いてくださいますように。アーメン

聖 歌 4 2 2 番 「長崎の空は 足もとからはじまっている」

「宮本家原爆受難記」宮本文甫のりとし

～「長崎原爆 キリスト者体験記」より抜粋～

「宮本文甫氏御夫妻は、五人の子供さんと爆心から程遠からぬ江平町に居住して全家族がその犠牲となられたのである。原爆投下の日に二名、それから二週間に四名が次々と原子病にたおれ、最後に文甫氏自身が原子症を発症した。その病症にある時、八月九日以来の恐るべき出来事を克明に記録された。唯一人次女和子さんが大村女子師範に在学して難を逃れた。和子さんは、八月十二日以来弟姉妹を、最後に父を看護され、その手記を父文甫氏の記録に追加した。全文百十枚に及ぶ。 【長崎聖三一教会・2010年原爆記念礼拝で朗読】

昭和二十八年八月九日

この日私は川南造船書の製缶工場にいた。(この造船所は、長崎郊外の香焼島にあり爆心地より十二キロの距離にある。午前十一時二分、一大閃光と爆風におそわれ、すぐに工場外にあるトンネルに退避した。十二時半に「出よ」という伝達があり、外に出てみると、長崎は大火災を起しているらしく、黄色い煙が全市を覆っている。人々はこれを眺めて騒いでいるのである。間もなく伝達が出た。「長崎居住者は、午後二時の船で帰宅せよ。」午後二時の船に乗る。大浦海岸に上陸し、歩いて長崎駅前まで来ると、火災のために先に行けない。火災と火災の間を縫って勝山町から西山水源地に至り、ここから山に登り、浦上の方向に突進する。浦上の爆心地帯を見下ろせる地点に来た。何という光景であろう。はるか向うの麓まで火と煙の焼野原である。空は黄色になり、太陽の光もボンヤリとしている。本原町のフランシスコ派神学校、崖潰して壁だけの浦上天主堂、その向うの山里小学校、その左方の城山小学校などいづれも煙を吹き出し、コンクリートの残骸をさらしている。目ぼしいこれなどの建物が白雲の中のかすんで見える惨憺たる言語に絶した光景である。それでも江平の自分の家だけは助かっていると希望的に考えながら山を下る。やっと江平を一目で見渡せる地点にたどりついた。見ると何にもない。樹の幹だけが棒杭のように白煙の中に立っているだけだ。我が家の前につく。燃えていない。潰れただけだ。離れた一軒家であったので類焼を免れた。「お父ちゃんは帰ったよ」と石垣の外から呼んでみた。「お帰えんなさい」と口々に子供達が返事した。文子「オ母チャンは町に出たまま未だ帰りません」「ソーカ、外の者は？」

文子「明子チャンがあそこに死んでます」と潰れた家の一隅を指した。妻は町内会の会計をやっており、集まった金を銀行に預けるといって出かけたのである。今朝も例によって朝から警報が鳴り、やがて解除になったので、「今のうちに」といって出たまま帰っていない。長女文子は、女子挺身隊員として工場に出勤する筈だったが、体の調子が悪いので床をとって休んでおり、寝たまの姿で家の下敷になった。懸命に壁を破って独力で外に出た。全身に打撲傷を受けている。三女博子 = ミシンをかけていると飛行機の爆音がしたので、庭に呼びかけ遊んでいる宏を抱き上げ、家の中に駆けこんだ途端に爆発が起って家の下敷となった。文子は近所の山口さんの応援を得て、博子と宏を救い出した。山口さんはその後気分が悪くなったといっって帰られた。無数の硝子の破片が皮膚に喰い込んでおり、全身打撲傷を受け、特に左腿に箆筒が倒れかかり、その上を屋根に圧せられて重症だ。

宏 = 博子に抱かれたまま下敷になり、左側の耳の上を長さ十五糎、深さ骨膜に達する裂傷を受けた。首をかしげている。四女智子 = 右大腿骨々折を起こし、その骨端が突き出しているのが外から分かるくらい、無数の硝子破片創。全身の打撲傷。五女明子 = 宏と庭に遊んでいる時、飛行機が来た一というので、宏を抱いた姉博子と同時に家の中にかげこんだのであるが、博子のすぐ横に梁に圧せられて、絶命。始めは「姉チャン、姉チャン」と呼んでいたが、間もなく死亡。大体以上の如くで、妻富士は行方不明、明子即死、文子、博子、智子、宏の四名は、負傷はしていても命に別状なしと考えた。庭に戸板を敷いて、これに寝たり、立ったりして、工場から帰った父を迎えたのである。時に午後六時半。この時まだ明子は梁の下になったままであった。通りかかった中学生二名に応援してもらって屍体を取り出した。箆筒の引き出しに遺骸を乗せ、友針の晴れ衣を見つけ出したのでこれをかけてやる。供えるべき花はない。やがて日も傾いた。子供達は昼食もとっていない。妻が万一に備えて屋敷内三ヵ所に米を埋めておいたの思い出し、これを掘り出し、壊れた鍋を拾ってこれで炊き米を作った。子供達は殆んど食べない。夜になると、天主堂の

火災で周囲が明るい。飛行機が時々飛来する。又幾度も附近に爆弾の炸裂音を聞いた。(註、この夜の、この方面に爆弾を投下したことを人々は後々まで恨んだ。)火災を免れたことは不幸中の幸いであった。潰れた家から夜具を引き出して戸板の上に親子五人が試練の第一夜を浅い眠りについた。

八月十日

浅い眠りから覚める。焼け跡の彼方から妻がとぼとぼ歩いてくるという幻想にフトとられる。ワレ鍋を修理してご飯を焚いたが、昨夜同様子供達は殆ど食べない。子供達は昨日のままの姿である。血だらけの破れた着物を着ている。潰れた家を掘り返しシャツや着物を取り出して着替えさせる。負傷の手当を受けさせねばと気ばかりあせるが、この惨状ではどうしてよいか見当がつかないで惑っていると、天主堂下に住む石崎君が立ち寄った。彼は同じ工場に働く人であるが、工場から帰ってみると家は焼け家族は一人も見当たらない。山に避難したのではないかと山のほうを探して歩いたというのであった。この石崎君に、川南の医療班に連絡して救護を依頼する。午後、妻富士の捜査に出かける。外に出てみると、石垣は崩れ、瓦礫が散乱し、樹木や家が倒れて道を塞ぎ、これが火災を起しているのである。火気は尚猛烈で通行できる道はかざられておる。人々が、家族を探して彷徨している。工場から帰宅してみると家は焼けて家族が見当たらないという人達ばかりである。至るところに屍体があるが、タドンのように真黒だ。男女の区別すら分らない。幾度も敵機が爆音を轟かせたが退避すべき壕も殆ど皆火に覆われている。とうとう妻らしい屍体を発見できなくて、子供達の待つところに帰った。夕刻になって待ちこがれた救護班が現われた。喜んだのもつかの間で、繃帯も薬品も使い果しており「又やって来る」と言い残して立ち去った。板を取り出して夜露を防ぐだけの小屋を作って第二夜を眠る。

八月十一日

明子の屍体が臭気を発し始めていると文子が言う。昨日は忙しくて火葬できなかったのであるが、今日はどうしても焼かねばならぬ。田の中に燃料を積み上げ、屍体を横たえる。子供達が一人一人明子に別れの言葉をのべる。牧師がいないので、私が神に祈りを捧げ、一同で讃美歌を歌ってから火をつけた。午前十時ごろ「宮本さん、宮本さん」と連呼する声が聞こえる。昨日石崎君に連絡を依頼した川南の救護班が十名程救護に来てくれたのである。涙がとめどなく流れる。大腿骨折と無数の硝子破片創を受けた智子と、頭部に大きな裂傷を負い耳の垂れ下がっている宏を救護所の大光寺に送ってもらうことにする。二人を担架に乗せ自分と文子が付添って出発する。真夏の太陽は容赦なく照りつける。通りの両側の火気は衰えていない。日陰を作る一本の樹すらない。ひどく喉が渴くので、破れた鉄管からほとぼしる水道の水をも文子の持っているヤカンに受けて皆でかわるがわる飲む。文子は一行に遅れがちである。(後で考えると、この時既に原子病を発症していたのである。)一時間半もかかって大光寺に着く。来てみると傷病者で充満している。火傷で化膿して膿汁を出している人が多い。智子も宏も傷が化膿しており、手早く応急手当を受けて繃帯して、寺の本堂に沢山の負傷者と枕を並べて寝せる。呻く者、泣く者、騒々しいことはなほだしい。文子を看護のため残して帰路についた。この火から炊き出しの握飯が配給され大いに助かる。副食には原爆で片面を焼いた南瓜、馬鈴薯、玉ねぎ、茄子を焼け残りの家から貰ってある。日は落ち、博子と二人だけの淋しい夜だ。大光寺の三人はどうしているだろうと案じながら第三夜を眠る。

八月十二日

明子の骨を拾い、花活の壺に納める。隣組長をしているのでその任務も果さねばならない。組内の生存者、負傷者、死亡者を調査する。メガホンで呼びかけて人々に彼是の注意を与える。この時、「お父チャマ!お父チャマ!」と遠くから呼ぶ声がする。和子だ。泣きながら天主堂の細道を駆けて来る。メガホンで第一声を送る。「泣いてはいかんよ!」泣く余裕など父にはないのだ。博子が不自由な足で石垣の下まで迎える。大村師範に行っていた和子は、昨日大村を出発し、長与国民学校で一夜を明し、徒歩で今着いたのである。午後和子と二人で、妻の捜査をかねて大光寺の子供達を見舞いに出かける……烈日の下に屍体は散乱する。既に腐敗しており、腫れ膨れて、中には皮膚が破

れて腐敗汁を流しているものもある。臭気が鼻をつく。屍体も幾十も積み上げたところもある。和子は、母の金歯をあてに針金で口を開き口内を調べている。衣類の一部でも焼け残っている屍体があると……もしや見覚えのある着物ではないか……と手にとって調べもした……が、それらしい屍体も見つからずに大光寺に着く。ところが三人ともいない。朝のうちに香焼島の川南病院に移送されていた。今からでは、島に行けたとしても帰りの船がない。島に帰るといって大河内君に食物や衣類を託して帰る。博子は今日から頭が痛いと言い出したが別に気にも止めず。

八月十三日

和子を香焼島に子供達の見舞いにやる。今日から炊き出しが中止となり、米の配給を焼け跡の松山町で受けることになる。博子の容態がよくない。しばしば飛行機が飛んでくるので、博子を壕の中に寝せることにする。和子は帰ってこない。壕の中で博子と二人で寝る。

八月十四日

博子が粘液便と血便を今日から出し始める。壕のわきに土を掘ってそこで便をさせることにする。妻の死体捜査に出かける。大学病院にたくさん収容されているという話を聞いたので行ってみる。ここは完全に焼けてコンクリートの残骸でしかないのに、大学病院だからというのであろう。病院も廊下も傷病者で充滿している。勿論布団などなく、コンクリート上に、むしろを敷き、裸体のままころがっている。皆化膿して異臭が鼻をつく、事務所も無ければ名簿もない。仕方がないので、物売り見たいに妻の名を呼んで廻る。「宮本フジはいませんか、宮本フジはいませんか」呼んでも答えるものはない。ここにもいない。諫早、大村、嬉野、早岐などの陸海軍病院に収容されていないか、最後の希望としてはそれだけだ。午前十一時ごろ、川南作業隊を引卒して篠田君が来て下さる。ありがたいことだ。造機設計課の数名の方々だ。家財の掘り出しがはかどっていないので掘出しをやっていただく。和子は今日も帰らない。なんとなく不安を感じる。

八月十五日

掘り出していただいた家財を整理する。夕方になって重大放送があり、終戦になったという噂を聞く。信じられない。デマだと気にもかけない。今日も和子は帰らない。いよいよ不安を感じる。明日は自分で是非行って見ることにする。

八月十六日

博子は衰弱してついに寝込んでしまった。正午頃から香焼ゆき。長崎駅前で新聞を手に入れる。原爆以来始めて見る新聞である。終戦が本当だと知った。

島に渡る船の中で、福岡の妹、大阪の妹、朝鮮の兄、神代の友人達に葉書を認める。

香焼島に着く。病院に入ると、宏、智子は別段変っていない。文子が重態に陥っている。和子が見舞いにきた十三日から文子が血便を出し始めて以来日々悪化していたのであった。和子は帰れる筈がなかった。宏が大喜びでベットを降りて膝にまたがり両手を首に巻いてしっかりしがみつく。「お母チャマは！」と尋ねる。「まだ帰りなさんネー」と答えるしかなかった。海を眺めながら「早く治ってあの小さな船で深堀に遊びに行こうね」というと、「ウン遊びに行こうネ」と喜んだ。お世話になった方々に、御礼を申し上げて事務所に行ってみる。ちょうど全員を集めて島本所長が訓示中であった。「この終戦を我々は承服できない。』武器をとって立つべし。この島は米軍にあげ渡し、深堀に渡り、野母半島に立てこもり、軍と行動を共にするのだ。……婦女子、傷病者は深堀に移す。』大変なことになった。外に方法が無い。三人の子供は、会社の診療班に一任するしかない」と決心する。帰る船便の都合で病室にもどらず船に乗る。

八月十七日

早朝に起きて子供達がバラバラになった時の用意に胸につける名札を作り、米、缶詰を持って行く。長崎でも、香焼

でも、急に終戦の混乱が始まって騒然としている。船員も逃げ出したので、船便も大変悪くなって十一時ようやく島に着く。病院に入ると、昨日と同様宏が大変喜んで膝にまたがり首にしがみつく。今日は母のことを尋ねない...不憫でならない。宏が、急に元気がなくなり熱も出していると、和子は言うのだがそんな様子に見えぬ。昨日の島本所長の話子供達に聞かせ、「バラバラにならぬ様に.....最後には、神代に落合うこと、それが出来ねば親戚を頼ってゆくこと、お互いに連絡すること.....」等を申し合わせる。持参した食料、迷い子札を残して帰路に着く。今日は宏が後を慕って別れたがらない。それで和子が宏を抱いて窓から手を振りサヨナラをする。これが宏と文子との永久の別れになってしまった。

八月十八日

空襲の心配がなくなった。湿気が多い壕の中に博子を寝せておくのは良くないので、この日終日かかって小屋を作り、これに博子を移した。博子は益々よくない。血便もやまない。この子だけ医者に診せていないのが申し訳なくて詫びた。そしたら博子はいろいろ自分の不注意を詫びるのである。

八月十九日

会社の梶谷さんがお出になって、宏が昨日、文子が今朝永眠したことをいんぎんに伝えて下さる。私はなんと答えたのが記憶がない。涙も出なかった。神の摂理を信じるのみ、しっかりせねばと思う。この不幸を博子に告げないことにする。その夜、博子は突然に鼻出血を始める。鮮血が流れ出てやまない。時々棒状に凝固した血塊を出した後で又出血する。どうにも出来ない。手の施し様がない。夜の明け方ようやく止血する。又この時から毛髪がゾロゾロと抜け始めた。

八月二十日

博子は意識が混濁し始めて、時折ウワゴトを言う。相変わらず血便を出す。夕刻、梶谷さんが来訪、宏と文子の遺骨をとどけてくださる。明子、文子、宏、三人分の遺骨が小屋にならぶ。

八月二十一日

博子昨日より静かになる。いよいよ危篤状態である。脈もいよいよ弱くなり、午後二時二十分永眠する。(年十七才)これで五人目である。近所の家族でも同様に死んでいった。御悔みの言葉を交わすだけで改めてお互いに行き来はしなかった。博子は苦しかった様子も無く、安らかに眠っている。博子ちゃんと呼んでみる。破れ小屋に、一つ蚊帳の中で、博子と枕を並べて眠る。

八月二十三日

近所の人達に手伝って貰うて、畑の中に古材をならべ、板を敷きこの上に博子を寝かせ、晴着のオメシを掛け、さらに燃料を積み上げ、父一人で讃美歌を歌いつつ火をつけた。

原爆の炸裂と同時に地上から青いもの一切が消えうせたのであるが、残った地中の根から芽を出し始めている。里芋が一番早く、雑草も追追芽を吹き出し始める。原爆で半焼けになったカボチャを食べると病気になるという風評があったが、食べつくした後で仕様がな。左様な物しか無いのだからイヤでも食べなければならない。人体実験に供せられているようなものだ。

八月二十四日

香焼島に渡る。島に上陸して間もなく和子がやってくるのに出合う。「和子！どうしたんだ。」

和子「智子ちゃんも死んでしまいました。」父「智子も死んだ？」.....辛うじてこう言えただけであった。和子は、骨を包んだ黒い風呂敷包みをさしだした。病院では、あれ程充満していた患者が片っ端から死んでゆき、一部退院して

数名が残っているだけであった。智子は二十一日夜から下痢を始め、二十二日から毛髪が抜け始め、全身に紫色の斑点が現われ、午後になると歯ぐきに血の塊がついて、それを取ってやると、後に又すぐ同様のものが出来た。夕方になると、鼻からも口からもゴボゴボ出血し出し、看護婦に注射して貰っても止血しない。終夜出血しつづける。二十三日も出血し続ける。「鏡を見せて」という。髪は抜けている。昨日から急に顔の半分、口から耳にかけて皮がぺろりとはぎとれている。その上鼻血で汚れている。鏡は見せられない。「鏡は無いよ。隣の小父さんに貸した」と言っても承知しない。しぶしぶ渡すと、自分の顔を眺めて悲しげに下においた。死を覚悟して姿勢を正し、手を胸に組んで死を待った。一時二十分永眠したという。この子は家の下敷になって、五時間も出して貰えなかったのであるが、一番元気そうであり、- この子だけは助かると、自分も和子も思っていたのに。和子と江平に帰る。五人分の遺骨を小屋に積み上げる。妻富士の遺骨はないが、ヘソのオを見つけたので加えた。

八月二十五日

正午から腹がゴロゴロなり、痛み出して下痢をする。血便が出た。子供達と同様の症状が自分の体に始まった。腰の力が抜けて歩行が出来なくなる。二十六日、二十七日症状は増悪するばかり、二十八日子供達が死んだ川南病院に入院する。一時危篤状態になり遺言までしたのであったが、危機を切り抜けて四十八日目に退院した。

(和子さんは二十一年三月師範を卒業し、神代小学校に奉職したので、父と一緒に住んだのであるが、和子さんの手記によると、父文甫氏は、精神的打撃もあったであろうが、一向に健康すぐれず、病氣勝ちでしばしば血便を出した。二十二年八月にまたまた血便を出したので、長崎に行って療養しても一向軽快せず、十一月には神代に帰り以後二ヶ月半も血便が続いた。そして腹が大きく腫れ、手足はやせ衰えて、写真で見る永井博士とそっくりの姿となり、十二月には医師より絶望を宣告され、年明けて三月十一日に天に召された。)

終わりに

この「報告書」は「2010年・神戸松蔭G P長崎平和旅行プロジェクト」の報告書です。

まず、長崎平和学習旅行団一行の出発を新神戸駅までお見送り頂いた川崎理事長を初め、このG Pを、企画・準備の段階から、祈りのうちに暖かく守り支えて下さった神戸松蔭女子大学教職員の方々（殊に宗教センターの緋田さん、山科さん）に、次に、ヌーンサービスの事前学習で、長崎キリシタン学習・被爆証言の労をお取り下さった竹田先生、岡部さんに、そして、訪問地・長崎でお世話になった方々、8月9日の原爆投下時刻の祈りを共に捧げて下さった長崎聖三一教会の方々、長崎活水学院を懇切丁寧に案内下さった二瓶教授に、この場を借りて、心より感謝を申し上げます。無事に「2010年・神戸松蔭G P長崎平和旅行プロジェクト」を終えることができましたのは、皆さんの御加禱・御支援のお蔭です。本当に、ありがとうございました。

旅行中、勝村団長から参加者一人一人に課せられていた課題は「長崎原爆投下は、戦争終結のためには、しかたがなかった」という意見について、思いを巡らすことでした。原爆投下とは、人類が自らの力で、自らの生命を破滅させることができるという悪魔の力が現実となったことです。ヒロシマ・ナガサキに人類史上初めての原子爆弾が投下されたあの日を境に、人類の歴史が、それ以前とそれ以後では全く変えられてしまった、それと、同じように、参加した学生一人一人の「核兵器」そして「平和」についての認識が、このG Pへの参加をきっかけに、大きく変えられ、深められたということ、そして、唯一の被爆国として「原子爆弾という核兵器の現実」を伝え続けることの責任の重さを知ることができたということ、この報告書から読み取って頂きたいと願います。

2010年・夏、長崎の街は、NHK大河ドラマ「龍馬伝」のお蔭で、訪ねるところどころ、例えば、グラバー邸、出島など、龍馬ブームで溢れていました。宿舎であった夜景の名所・稲佐山は主演の福山雅治さんの実家があり、頼みもしないのにタクシーの運転手さんがその前を通ってくれたことも、参加者にとって、懐かしい思い出になったと思います。しかし、一番、大切なことは、私たちは、2011年の8月9日に一緒に長崎の地にいたということ、そして、平和公園・爆心地を訪れ、折鶴を献納し、共に祈っていた、という厳粛な事実です。このグッド・プラクティス（素晴らしい経験）が、参加者のこれからの人生の道標となることを期待するものです。

最後に、このG P企画に賛同し、真摯な姿勢で、長崎平和旅行に参加をして下さった参加学生の皆さん一人一人に、この場を借りて、心より感謝を申し上げます。言うまでもないことですが、皆さんの参加がなければこの神戸松蔭G P・長崎平和旅行を実現することはできませんでした。参加された一人一人が、このG Pを通して「平和を実現する人々は幸いである（マタイ5：9）」とのみ言葉を生きる、新しい歩みを始められることを心より願い、祈ります。

原爆は長崎でおしまい、長崎がピリオド、平和は長崎から

（「如己堂」に記されていた永井 隆博士の「平和塔」より）

キリストの平和

（文責 チャプレン 藤井 尚人）